

魔法人形

江戸川乱歩

青空文庫

腹話術

小学校六年生の宮本ミドリちゃんと、五年生の甲野ルミちゃんなどが、学校の帰りに手をひきあつて、赤坂見附の近くの公園にはいつていきました。その公園は、学校とふたりの家とのまん中ほどにある、千平方メートルぐらいの小さな公園で、みどりの林にかこまれ、三分の二は芝生、三分の一は砂場になっていて、砂場のほうには、ぶらんこやすべり台、芝生のまわりには、屋根のあるやすみ場所や、ベンチなどがあります。

いつもは、ぶらんこやすべり台で、たくさん子どもが遊んでい

るのですが、その日はどうしたわけか、ひとりも子どもの姿が見えません。芝生のほうもがらんとしてだれもいないのです。

「まあ、さびしいわねえ。きようはどうしたんでしよう？」

ミドリちゃんが、ふしぎそうにいいました。ミドリちゃんはからだも大きく、ふつくらした顔の色つやがよくて、快活な、しっかりした子でした。

「でも、あそこにふたりいるわ。おじいさんと、小さな子どもと……。」

ルミちゃんが、そのほうを指さしました。

ルミちゃんは、ミドリちゃんにくらべると、ずっと小がらで、人形のようにかわいい顔をしていました。

「あら、ほんと。あんなすみっこにいるもんだから、気がつかなかった。あのおじいさん、すばらしいひげね。」

なんだかやさしそうなおじいさんなので、ふたりは、つい、そのほうへ近づいていきました。

大きな木の下へのベンチに、みごとな白ひげを、胸にたらしおじいさんが、ちよこんと腰こしかけていました。灰色の背広をきて、小さな烏うち帽をかぶっています。その烏うち帽の下から、まっ白な毛がふさふさとたれ、まゆも口ひげも、長いあごひげも、みんなまっ白です。

そのおじいさんの膝に、五つか六つぐらいの、かわいい男の子が腰かけています。その子は、あらいこうしじまの背広に、同じ

がらの鳥うち帽を、かぶっていました。ほおがりリングのように赤くて、大きな黒い目をくりくり動かしています。

ふたりの少女が、手をつないで近よってくるのを見ると、白ひげのおじいさんは、にっこり笑いました。黒いふちのめがねの中から、ほそい目が、やさしそうに光っています。

「ほら、かわいいおねえちゃんがいらつしたよ。坊や、お友だちになつていただくかい？」

おじいさんが、ひざの上の男の子にいました。

すると、坊やの黒い目が、くるくると動き、赤い口が、ぱくぱくと、ひらいたり、とじたりしました。

「うん。ぼく、こつちのおねえちゃんがすきだよ。」

かん高いいきいきい声です。それにしても、この坊やの口と目は、なんて大きいのでしょうか。赤いくちびるを、ぱくぱく動かすと、まるで、耳までさけるように見えます。かわいいけれども、へんな子です。

「こつちのおねえちゃんて、この子かい？」

おじいさんが、ルミちゃんのほうを指さして見せました。

「うん、そうだよ。」

坊やが、いきいきい声で答えました。

「ハハハ……。ぼうやが、あなたが好きだっついていいいます。あなた、なんてお名まえ？」

おじいさんが、笑いながらたずねました。

ルミちゃんは、すきだといわれたので、ポツと顔を赤くして、はずかしそうに答えました。

「甲野ルミっていうの。」

「おお、ルミちゃんだね。いい名だ。わたしは、青山あおやまにすんでいる黒沢くろさわというものですよ。坊や、このおねえちゃんはね、ルミちゃんだよ。」

「うん、ルミちゃんと、握手しよう。」

坊やが大きな口を、ぱくぱくさせました。

「ハハハ……。坊やが、あなたと握手がしたいんですつて。」

坊やは、小さな手を、グツとこちらへさしました。

じぶんをすきだといってくれたので、ルミちゃんのほうでも、

このかわいい坊やがすきになつてしまいました。それで、右手を出して、坊やの小さな手をにぎりました。

おやつ、なんというつめたい、かたい手でしょう。坊やの手は、まるで木でできているように、ちつとも、うごかないのです。こちらがにぎつても、にぎりかえしもしないのです。ルミちゃんはびつくりして、手をはなしました。

そして、へんな顔をして、坊やをじつと見つめています。この坊やは、いったい、生きていますでしょうか。木かなにかでこしらえた、人形ではないのでしょうか。すると、おじいさんが、さもおかしそうに笑いだしました。

「ハハハ……。やつと、わかつたかね。この坊やは人形なんだよ。

ジャックという名だよ。わたしのだいじなかわいい人形なのさ。」
「ああ、わかった。おじいさんは腹話術師ふくわじゆつしなのね、坊やのかわりに、おじいさんが、口を動かさないで、子どもの声でしゃべっていたのでしよう。」

ミドリちゃんがいいあてました。いつか、パパとママといっしょに寄席よせへいったとき、腹話術を見たことがあったのです。でも、そのときの人形は黒んぼうの人形で、はじめから人形ということがわかったのに、おじいさんの人形は、ほんとうの坊やのようによくできているので、いままで気がつかなかったのです。見れば見るほど、まるで生きているような人形です。

「そうだよ。よくわかったね。ふつうの腹話術の人形とちがって、

これは、わたしがたんせいしてこしらえた、上等の人形だから、なかなか見わけがつかないのだがね。あんたは、りこうなおじょうさんだね。なんていう名？」

「宮本ミドリっていうの。それじゃあ、このお人形、おじいさんがつくったの？」

「うん。わたしは人形師なんだ。人形をつくるのが本職だよ。腹話術は、ちよつと、なぐさみにやっているだけさ。しかし、なかなかうまいだろう？」

「ええ。この坊やが、ほんとうにしやべっているように聞こえたわ。」

「こうして、わたしの右手が、人形の服の下から背中へはいつて

いるのだよ。人形の首にしかけがあつて、指でそれをひっぱると、目が動いたり、口をぱくぱくやったりするのだ。ほら、ごらん！

またしやべりだすから……。―

おじいさんがそういつたかと思うと、坊やの目がくりくりと動き、赤い大きな口が、ぱくぱくしはじめました。

「ルミちゃん、ぼくと遊ぼうね。ぼく、ルミちゃんがとても好きだよ。ミドリちゃんは、そんなに好きじゃない。だから、ぼく、ルミちゃんに話すんだよ。ね、ぼくのおじいちゃんは人形をつくる名人なんだよ。おじいちゃんの家にはね、ウジャウジャ人形がいるんだよ。おとなの男もいるし、女もいるし、おじょうさんもいるし、ぼくみたいな子どもも、たくさんいる。それから、動物

だっているんだよ。クマや、サルや、犬や、ネコや……。」

そういうたびに、かんじょうをするように、大きな目を、くるつ、くるつと動かします。ほんとうにかわいい坊やです。

ルミちゃんは、その顔を見ていると、人形だとわかっていても、やっぱり、坊やがすきでたまりませんでした。それに、白ひげのおじいさんが人形づくりの名人だと聞くと、このおじいさんもすきになり、おじいさんの家にある、たくさんの人形が見たくなりました。

「美しいおねえさまの人形もあるの？」

「うん、あるよ。ゆうぜんのふり袖そでを着て、きんらんの帯をしめた、うっとりするようなおねえさまがいるよ。そして、そのおね

えさまが、やさしい声で歌をうたうんだよ。」

「まあ、歌をうたうの？ 人形が？」

「うん。ぼくのおじいちゃんは名人だからね。機械じかけの人形をつくるんだよ。歌もうたうし、ものもいうし、歩くこともできる。おじいちゃんの人形は、みんな生きているんだよ。ぼくだって生きているだろう？」

ルミちゃんは、坊や人形の話をも、目をかがやかして聞きいってました。もう、おじいさんの家の人形が見たくてしょうがないのです。

そのときミドリちゃんが、「ちよつと。」といって、ルミちゃんの手をひっぱって、すこしはなれたところへつれていきました。

「ね、もう帰りましようよ。ものをいったり歩いたりする人形なんて、なんだか気味がわるいわ。ね、帰りましようよ。」

ミドリちゃんがささやきました、ルミちゃんは、いうことをききません。すっかり、おじいさんがすきになってしまったからです。それに、坊や人形が、ルミちゃんだけすきだといっただので、ミドリちゃんは、やきもちをやいて、いじわるをいつているのだと思います。

「あたし、もっと坊やのお話を聞きたいわ。ミドリちゃん、さきに帰ってもよくつてよ。」

ルミちゃんはそういつて、ミドリちゃんの手をふりはらつて、ベンチの前にもどりました。

ミドリちゃんは、しかたがないので、しばらく待ってから、また、はなれたところへルミちゃんをひっぱって行って、帰るようになすめました。ルミちゃんは、どうしてもいうことをききません。とうとう、けんかになってしまいました。

「じゃあ、あたし、さきに帰るわ。」

ミドリちゃんはそういって、さつさと公園の外へ出ていくのでした。

生きた人形

あとに残ったルミちゃんは、白ひげのおじいさんにさそわれて、

とうとう、おじいさんの家へいつてみるようになりました。

「なあに、すぐ近くだよ。公園の外に自動車が待たせてあるから、わけはないよ。晩のごはんまでには、お家へおくつてあげるからね。」

おじいさんは、やさしい声でそんなことをいいました。

よく考えてみれば、腹話術のおじいさんが、自動車を待たせて、公園のベンチに腰かけているなんて、なんだかへんではありませんか。ルミちゃんは、もっと用心しなければ、いけなかったのです。いくらやさしいおじいさんだって、はじめてあつた人につれられていくなんて、いけないことでした。

しかし、ルミちゃんは、歌をうたったり、歩いたりする人形が

見たくて、もう夢中でした。なにも考えているひまもなかったのです。

おじいさんは、坊や人形をだいて歩きだしました。ルミちゃんはそのあとからついていきます。

公園の出口に、りっぱな自動車がとまっていて、おじいさんが近づくと、運転手がとびだしてきてドアをひらきました。

坊や人形の中にはさんで、おじいさんとルミちゃんが、うしろの席に腰かけますと、自動車は、すぐに走りだしました。町かどをあちこちとまがりながら、進んでいきます。もう、ルミちゃんのみったく知らない町です。なんだか、心ぼそくなってきました。「おじいさん、まだ遠いの？」

「なあに、もうすぐだよ。」

そんな会話が、なんどもくりかえされましたが、なかなか車はとまりません。さつきおじいさんは、「青山に住んでいる黒沢というものだ。」と名のりました。公園は赤坂見附の近くにあるのですから、青山まで、そんなに遠いはずはありません。自動車は、さつきからもう二十分いじようも走っていました。ルミちゃんは、ここでまた、うたがってみなければいけないかったです。ルミちゃんはおじいさんが青山といったのを聞きもらしたのでしようか。

それからまた十分ちかくも走って、やっと自動車がとまりました。なんだか、焼けあとの原っぱのようなさびしいところです。

その原っぱの、草のぼうぼうはえた中に、古い一階だての木造の西洋館が立っていました。

「さあ、ここがわたしの家だよ。」

おじいさんは自動車をおりて、右手で坊や人形をだき、左手でルミちゃんの手をひいて、草の中を歩いていきます。

「ルミちゃん、この坊やもね、ほんとうは歩けるんだよ。いいかい、ほら、ごらん。」

そういつて、右手にだいていた人形を、そつと地面におろしますと、これはどうでしょう。坊や人形は、そのままたおれもしないで、機械じかけのようなへんなかつこうで、ピヨコピヨコと、歩きだしたではありませんか。

「ルミちゃん、はやくいらっしやい。こつちだよ。」

歩きながら、坊や人形がそんなことをいうのです。まるで生きているようです。しかし、これも、おじいさんの腹話術にちがひありません。

おじいさんは、ポケットから大きなかぎを出して正面のドアをひらき、ふたりの人間と、ひとりの人形が、その中へはいつていききました。そして、入口のドアがパタンと閉しまったとき、ルミちゃん、なんだかゾーツと、からだが寒くなってきました。なんともいえない、恐ろしい気がしたのです。こんな気味のわるいところへこなければよかつたと、後悔しはじめたのです。

「おじいさん、あたし、もう人形なんか見なくてもいいから、帰

りたいわ。ねえ、帰らして！」

ルミちゃんがそういいますと、おじいさんはやさしく笑って、「ハハハハ……。なにをいいだすんだね。これからおもしろいものを見るんじゃないか。さあ、そんなことをいわないで、こちらへいらつしやい。」

そういつて、かたくルミちゃんの手をにぎったまま、うす暗い廊下を、ぐんぐんとはいつていくのです。夕がたですから、家中は、もううす暗くなっています。廊下のドアをひらいて、部屋にはいりました。部屋はまっ暗です。あとでわかったのですが、その部屋の窓には、ぜんぶ、あつい黒ビロードのカーテンがしめてあつたのです。

「待ちなさい。いま、ろうそくをつけるからね。」

おじいさんはそういつて、マッチを出して、机の上のろうそくに火をつけました。古めかしいしよく台に、三本のろうそくが立っているのです。その赤ちやけた光が、部屋の中をぼんやりと照らしました。

ルミちゃん、かすかな光で、部屋の中を一目見ると、「あつ。」といったまま、立ちすくんでしまいました。かなり広い部屋でしたが、その四方の壁ぎわに、洋服を着た人間や、和服を着た人間や、はだかのままの人間が、ウジャウジャと立っていたからです。

この家には、こんなにたくさん人が住んでいるのかしらと、び

つくりしましたが、よく考えてみると、それはみんな人形なのでしよう。あつちをむいたり、こつちをむいたりして、ただ、じつと、つつ立っているばかりで、すこしも動きません。でも、なんてよくできた人形でしょう。みんな、生きた人間とそっくりではありませんか。

たくさんの人形が、しいんとしずまりかえつて、身うごきもせずつつ立っているありさまは、じつに気味のわるいものです。見ていると、ゾーツとこわくなってきます。

「ああ、ルミちゃん、ふり袖のおねえさまが見たいのだったね。いま、呼んであげるよ。」

おじいさんはそういって、机の横についている、たくさんのお

しボタンの一つを、グツとおしました。

すると、部屋のむこうのすみのドアが、スーツと音もなくひらいて、そこから、目もさめるような美しいものが、あらわれしました。十七―八のきれいな女の人です。髪は島田しまだにゆつて、長いたもとのゆうぜんぜんの着物を着て、ピカピカ光るきんらんの帯をしめて、しずかに、こちらへ歩いてくるのです。

ルミちゃんは、こんな美しい顔を、いままで一度も見たことがありません。ただもう、ぽかんと口をあけて、見とれているばかりです。

そのきれいなおじょうさんは、すり足のような、みような歩きかたで、だんだんこちらへ近づいてきました。近づくにしましたがっ

て、その顔はいよいよ美しく、着物や帯はかがやくばかりにあでやかです。

「あら、お客さまね。まあ、かわいいわね。どこのかた？」

人形の小さい口がひらいて、白い歯が見えました。まつげの長い黒い目が、ぱちぱちとまたたきました。

「これはルミちゃんだよ。おまえに会いたいというので、つれてきたんだよ。」

おじいさんが答えました。

「まあ、ルミちゃんっていうの。仲よしになりましたよ。」

玉をころがすような美しい声です。ああ、これがほんとうに人形でしょうか。この美しい声が、おじいさんの腹話術なのでしょう。

うか。ルミちゃんには、とてもそうは思えませんでした。

「ハハハ、……びっくりしているね。どうだ、わしが、たんせい
をこめてつくりあげた人形だよ。ルミちゃんは、この美しいおね
えさまと、いつまでも遊んでいたいとは思わないかね。いや、そ
れよりは、ルミちゃんもこんな人形になりたいとは思わないかね。
ウフフフ……、わしは、生きた人間を人形にすることもできるの
だよ……。」

それを聞くと、ルミちゃんは、ぞつとして、顔から、サーツと
血がひいていくような気がしました。そして、からだがぶるぶる
ふるえてきました。

恐ろしい魔法

「あたし、人形になるの、いやだわ。」

ルミちゃんは、ふるえ声で答えました。

「いやかね？　だが、もうじき人形になりたくなるかもしれないよ。あちらへ行って、このおねえさま人形と遊んでくるがいい。

さあ、べにこ紅子、ルミちゃんをおまえの部屋へつれて行ってあげなさい。」

おねえさま人形は、紅子という名でした。

そこで紅子さんは、おじいさんにいわれたとおり、ルミちゃんの手をひいて、じぶんの部屋へつれていきました。

そこは、鏡台や、美しいたんすや、ガラス箱にはいったお人形などの飾つてある、きれいな部屋でした。ここも、窓に黒いカーテンがかけてあつて、机の上のしよく台に、ろうそくの火がちろちろとゆれていました。

紅子さんは、ルミちゃんをすわらせ、じぶんも、そのそばにすわり、やさしい顔で、じつとルミちゃんを見つめるのでした。

「おねえさまはほんとうに人形なの？　そうじゃないでしょう。生きているんでしょう？」

ルミちゃんは、さつきからふしぎでたまらなかつたので、まずそのことをたずねてみました。

「ええ、生きています。でも、半分しか生きていないのよ。そし

て、もうじき、あとの半分も死んでしまつて、ほんとうのお人形になるの。」

紅子さんは、なんだかわけのわからないことをいいました。ルミちゃんも、びっくりして、まじまじと紅子さんの顔を見つめればかりです。

「ほほほほ……。わたしのいいかたが悪かつたわね。でも、半分生きているというのはほんとうなのよ。おじいさんがそばにいないのだから、わたしの声が、おじいさんの腹話術でないことはわかるでしょう。それから、わたしが歩くのも、からだを動かすのも、機械じかけではなくつて、わたしがじぶんで動かしているのよ。」

「じゃあ、おねえさまは生きているのだわ。どうして、半分死んでいるなんていうの？」

「ではね、ルミちゃんによくわかるように、わたしの身のうえ話をしまししょうか。」

「ええ。」

ルミちゃんは目をかがやかせて、じつと紅子さんの美しい顔を見つめました。

「わたし、ここのおじいさんは、ずっとまえから知っていたのよ。でも、ここへきたのは、つい二週間ぐらいまえなの。なぜわたしがこの家へきたかといいますとね、あるとき、おじいさんがわたしの顔をつくづくながめて、『紅子さんは、いまが、一生のうち

でいちばん美しいときだよ。』というの。わたしは、じぶんでも
なんだかそんなふうに思っていたので、『年をとりたくない。い
まのまま年をとらないでいたいわ。』と、ひとりごとのように
いったのです。すると、おじいさんが、へんな笑いかたをして、
『年をとらないくふうがあるよ。』というじやありませんか。

『では、どうすればいいの。』ときくと、『わたしのうちへおい
で。いまの美しさのまま、しょうがい年をとらないようにしてあ
げる。わしは魔法つかいだからね。』というのよ。そのとき、わ
たし、魔法をかけられてもかまわないから、一生美しくいたいと
思ったのよ。そして、おじいさんの口ぐるまにのって、とうとう
こんなことになってしまったのよ。』

こんなことって、どういうことなのでしょう、ルミちゃんには、まださっぱり、わけがわかりません。

「おじいさんはね、魔法つかいのような発明家なのよ。ふしぎな薬を発明したのよ。その薬を注射すると、人間のからだか、だんだんかたくなって行って、人形になってしまうのよ。ルミちゃん、わかる？ わたし、その薬で、もう半分ぐらい人形になってしまうっているのよ。ほら、ここをさわってごらんさい。」

紅子さんが両手を前に出したので、ルミちゃんは、それにさわってみました。おやつ、なんてかたくて、すべっこい手でしょう。それに、このつめたさはどうでしょう。土の上にごふんをぬって、みがきをかけたお人形のはだと、そっくりではありませんか。ル

ミちゃんは、ハツと手をひいて、なんともいえないへんな気持ちになつて、思わず涙ぐんでしまいました。

「さあ、こんどはここへ、さわつてごらんさい。」

紅子さんが、美しい顔をルミちゃんに近よせて、右のほおを出しましたので、ルミちゃんは、またそのほおにさわつてみました。手と同じように、つめたくて、かたくて、すべっこいのです。生きた人間のはだではありません。

「わかつて？　こんなふうに、外がわから、だんだんかたまつていって、しまいには、おなかの中までこちこちになつて、そして、もう息もできなければ、ものをいうことも、できなくなつてしまふのよ。つまり、人間が人形にかわるのよ。そのかわりに、わた

しの若さと美しきは、永久に、すこしもおとろえないで残るの
わ。人間は、どうせいつかは死ぬんでしよう？ それに、わたし、
長生きして、しわくちやのおばあさんなんかになりたくないわ。
たとえ人形になってしまっても、いまの若さでいたいよ。ルミ
ちゃんはまだ小さいから、そういう気持はわからないでしょうね
。」

ルミちゃんは、くいいるように紅子さんの顔を見つめて、ふし
ぎな話を聞いていました。ルミちゃんにだって、紅子さんの気持
が、まったくわからないわけではありません。しかし、うすうす
その気持がわかるだけに、かえって恐ろしくなってくるのです。
ルミちゃんは、こわい夢をみているのではないかと思いました。

胸の中に、つめたい風が吹いているような感じがして、目には、涙があふれてくるのです。

そのとき、うしろにかすかな音がしたので、ルミちゃんは、ギョツとしてふりむきました。すると、いつのまにはいつてきたのか、そこに、あの魔法つかいのおじいさんが、うす気味わるく、にやにや笑って立っていました。

「ルミちゃんも、おねえさまのように、人形になりたいとは思わないかね。ルミちゃんが人形になったら、どんなにかわいいだろうね。」

ルミちゃんは、それを聞くと、ゾーツとして、いきなりいすから立ちあがりました。

「いやよ。あたし、人形になんかになるのいやだわ。」

そう叫んで、部屋から逃げだそうとしました。

「おっと、どっこい。逃げようたって、もうだめだよ。さあ、おとなしくしておいで。いまに、かわいい、かわいいお人形さんにしてあげるからね。」

魔法つかいのおじいさんは、ルミちゃんのからだを、しっかりとだきとめて、耳のそばに口をよせて、恐ろしいことをささやきつづけるのでした。

ルミちゃん人形

赤坂見附に近いルミちゃんの家では、ルミちゃんが夜になっても帰らないので、大きわぎになっていました。

ルミちゃんのおとうさんの甲野光雄このみつおさんは、ある大きな会社の重役で、たいへんお金持ちでした。ルミちゃんは、その甲野さんのひとりっ子ですから、おとうさんやおかあさんの心配は、ひとつおりではありません。

学校や、お友だちのうちや、ほうぼうへ電話をかけたり、つかいを出したりして、ルミちゃんのゆくえをさがしましたが、やがて、お友だちの宮本ミドリちゃんが、公園でルミちゃんとわかれたこと、そのときルミちゃんは、白ひげの人形つかいのおじいさんと話をしていたから、あのおじいさんの家へつれていかれたの

ではないか、ということなどがわかりました。

ミドリちゃんはまた、おじいさんが、「わたしは青山に住んでいる黒沢というものですよ。」といったあのことばも、ちゃんとおぼえていました。

甲野さんは、すぐにこのことを警察に知らせましたので、警察では、青山の黒沢というおじいさんを探しましたが、そういう白ひげのおじいさんは、どうしても見つかることができませんでした。

あのおじいさんは、名まえも住まいも、でたらめのうそをいったのにちがいありません。しかたがないので、警察では、おじいさんが人形をだいてベンチにこしかけていたという公園のまわり

の店屋などを、一軒一軒しらべましたが、これという聞きこみもないままに、一日二日と日がたつていきました。

ルミちゃんのおとうさんやおかあさんの心配は、ひととおりではありません。おとうさんの甲野さんは、会社も休んでしまつて、新聞に「たずね人」の広告を出したり、毎日警察へ出かけて、捜索のようすをたずねたり、ルミちゃんをさがしだすために夢中になつていました。おかあさんは、神社におまいりして、「どうかルミちゃんがぶじでいますように。」とおいのりしたり、うらないにみてもらつたり、すこしも家にじつとしてはいられないのでした。

そんなふうにして、ルミちゃんがいなくなった日から、もう十

日もたつてしまいました。その十日めの午後のことです。甲野さんの家へ大きな荷物が配達されました。郵便ではなくて、運送屋がトラックにつんで持ってきたのです。

それは、りんご箱をひとまわり大きくしたような、長さ一メートル半ばかりの長つぽそい木の箱を、こもでつつんだものでした。さしだし人の名はありませんが、あて名はたしかに甲野光雄さまとなっており、住所もまちがないので、ともかく受けとりました。

甲野さんの家の女中さんたちが、こもをといてみますと、中は白い木の箱で、そのおもてに、毛筆もうひつの大きな字で、

甲野ルミの棺かん

と書いてあるではありませんか。

女中さんたちは、ギョツとして顔を見あわせました。そして、あわててこのことを奥へ知らせたのです。

それを聞くと、ルミちゃんのおとうさんとおかあさんは、びつくりして玄関へとびだしてきましたが、「甲野ルミの棺」と書いた木箱を見ると、ふたりともハツとして、まっさおになつてしまいました。おかあさんは、もう涙ぐんでいます。

ふたりとも、箱をあけるのが恐ろしいので、いつまでも、だまつて立つていました。でも、そうしていてもしかたがないので、おとうさんの甲野さんは、思いきつて箱をあけてみることにし、金づちや釘くぎぬきを持ってこさせました。

箱のふたは、釘でうちつけてありましたが、金づちの柄えでこじあけると、すぐにひらきました。そして、いつでもふたがとれるようになっても、それをとりのけて中を見るのが恐ろしいのです。甲野さんは、まだしばらくためらっていましたが、とうとう決心して、サツとふたをとりました。

ああ、やっぱりそうでした。箱の中には、ルミちゃんが横たわっていました。学校へいったままの服装です。

おかあさんは、そのルミちゃんの中からだに取りすがって泣きふしました。女中さんたちのあいだに、「ワーツ。」という泣き声がおこりました。

甲野さんも、目にいっぱい涙を浮かべて、泣きふしているおか

あさんをしずかにひき起こし、箱の中のルミちゃんの姿を、じつと見つめました。

ああ、これがルミちゃん死がいのなのでしょう。かわいらしい黒い目を、ぱつちりと、見ひらいています。顔も青ざめてはいないで、うつすらと赤みがさし、いまにも笑いだしそうな明るい表情です。

甲野さんは、ふしぎそうに首をかしげて、ルミちゃんのからだを、あちこちと、しらべてみました。殺されたとすれば、どこかにきずがあるだろうと思ったからです。

しかし、いくらさがしても、きずあとなんか一つも見あたりません。それに、ルミちゃんのからだのようすが、どうもへんなの

です。ルミちゃんは、こんなに軽かったでしょう。生きていたときの半分もめかたがないように思われます。

それに、顔も手も足も、なんだかこちこちして、いやにかたいのです。いくら死がいだって、こんなにかたくなるはずがありません。甲野さんは、指のつめでルミちゃんの顔をたたいてみました。すると、こつこつと音がするではありませんか。

「あつ、これは人形だよ。泣くことなんかありやしない。だれかが、ルミちゃんとそっくりの人形を送ってきたんだよ。」

甲野さんにいわれるまでもなく、もうそのときは、おかあさんも、人形だということを気づいていました。

女中さんたちは、

「あらまあ、お人形さんでしたの？」

「棺なんて書いてあるもんだから、すっかりだまされちゃった。」
「でも、この人形、なんてルミちゃんによくにているんでしょう。
かわいいわね。」

などと、にわかにもるい声をたてるのでした。

甲野さんは腕ぐみをして、じつと考えこんでいました。

これはいったい、どういういみなのでしょう。なんのために、
ルミちゃんとそっくりの人形を送ってきたのでしょうか。これはな
にか、深いわけがあるのではないのでしょうか。

そのときおかあさんは、なにかに気づいて、ハツとしたように
甲野さんの顔を見あげました。

「ねえ、あなた。この洋服は、たしかにルミちゃんのですわ。ここに、かぎざきをなおしたあとがあるでしょう。これは、わたしがじぶんでなおしてやったのですもの、よくおぼえてますわ。」

すると、人形のからだに、ルミちゃんの洋服が着せてあるのでしょうか。いったい、どうしてそんなことをしたのでしょうか。あるいは、ルミちゃんは、洋服をぬがされ、はだかにされて、どこかに閉じこめられているのではないのでしょうか。

おかあさんは、まっ暗なつめたい部屋に、はだかのルミちゃんがかごろがさされている姿が、まざまざと目の前に浮かんでくるように、もう気が気ではありません。ルミちゃんがかわいそうで、またしても、目にいっぱい涙があふれてくるのでした。

甲野さんもおかあさんも、そこまでは気がつきませんでした、読者のみなさんは、知っていますね。箱の中に横たわっていたのは、ほんとうに人形だったのでしょうか？ もしかしたら、あの魔法つかいのおじいさんが、ルミちゃんを人形にしてしまったのではないのでしょうか？

おねえさま人形の紅子さんは、だんだん、からだがかたくなつていって、しまいには、ほんとうのお人形になってしまふのだといいました。それと同じことが、ルミちゃんのからだにも、おこったのではないのでしょうか。

おとうさんとおかあさんは、ともかくも、ルミちゃん人形のはいった箱を奥ざしきにはこぼせて、その前にすわって、心配そう

に顔を見あわせながら考えこんでいました。

するとそのとき、隣の部屋にある電話のベルが、けたたましくなりひびいたので、甲野さんが受話器を耳にあてました。

おかあさんがこちらから見ていますと、受話器をとった甲野さんの顔がサツと青ざめ、ギョツとしたように目が大きく見ひらかれるのが、よくわかりました。

「き、きみは、いったい、だれだっ？」

甲野さんが、どもりながらどなりつけました。受話器を持つ手が、ぶるぶるふるえています。

小林少年

甲野さんがびっくりしたのは、むりもありません。受話器からは、じつに恐ろしいことばが聞こえてきたのです。

「甲野光雄さんかね。わたしは黒沢というものだ。きみのルミちゃんは、わしがあずかっている。なぜあずかっているかは、いうまでもないことだ。きみから身のしろ金をちようだいしたいからだ。一千万円でよろしい。それも、どこそこへ持つてこいというのじゃない。わしのほうから取りに行く。きみの書斎の机のひきだしへ、札たばを入れておけばよろしい。あすの夜十時に、きつと取りに行く。そのとき、警察などをよんで、わたしをつかまえようとしたら、ルミはほんとうに人形になってしまうぞ。わたしは、生き

た人間で、人形をつくる方法をこころえているからね。そして、どこかのショーウィンドーに飾るのだ。それがいやだったら、わしをとらえようとしてはいけない。わかったかね。あすの晩は、べつに、わしのはいる入口を用意しておいてくれなくてもよろしい。いくらかぎがかかっても、わしには、自由にひらく力があるのだ。それじゃ、約束したよ。もし、このわしのさしずにしたがわなかったら、ルミが人形になるのだ。わかったね。」

そして、こちらがなにも答えないうちに、電話がきれてしまいました。

「まあ、あなた、いまの電話、だれからでしたの？　あなたのお顔、まっさおですわ。」

ルミちゃんのおかあさんが、じぶんも青くなつて、心配そうにたずねました。

甲野さんは、女中さんたちをおぎけておいて、おかあさんに、電話のいみを、話してきかせました。

「警察にとどけるのがあたりまえだが、そうすると、新聞に書きたてられる。身のしろ金をわたそうとしても、わたせなくなる。

あいつは、やけくそになつて、ルミをどんなめにあわせるかもしれない。それよりも、わしは、そつと私立探偵にたのもうと思う。あけちこごろう明智小五郎という名探偵がいる。わしの友だちがせわになつたこ

とがあるのです、明智さんの腕まえはよく知つている。一千万円がおしいのではない。ルミの命が一千万円で買えるなら安いものだ。

しかし、なにもしないでむこうのいうままになるのも残念だし、金だけとられてルミが帰ってこなかったらたいへんだ。それで、腕のある探偵にたのんで、そういうことがないように、よく相談しようと思うのだよ。」

甲野さんのいうことはもつともなので、おかあさんも、それに賛成しました。

そこで甲野さんは、奥まった部屋のべつの電話で、明智探偵事務所を呼びだしますと、子どもらしい声が電話口に出ました。

「明智先生は事件で旅行中です。四―五日お帰りになります。いそぎのご用ですか？」

「じつは、ひじょうに重大な、いそぎの用件なのですが、こまっ

たな。」

「では、ぼくがおうかがいしましょうか。ぼく、先生からるす中のことをまかさされている、小林というものです。」

「ああ、きみが、うわさにきいている小林君ですか。それじゃあ、すぐきてくれませんか。」

甲野さんは、小林少年のてがら話を、いろいろ聞いていました。それに、小林少年にあえば、明智探偵の旅行さきもわかり、電話で相談することもできるのですから、ともかくきてもらうことにして、道じゆんを教えました。

麴こうじまち

町アパートの明智探偵事務所と、赤坂の甲野さんの家とはごく近いので、それから二十分もたったころには、応接間のテ

ーブルをかこんで、甲野さん夫婦と小林少年とが、ひそひそ話をしていた。

「電話でも黒沢と名のついていたが、これはどうも偽名らしい。ルミの友だちが、『青山の黒沢』といったのをおぼえていたので、警察では、青山へんを手をつくしてしらべたが、黒沢という家は発見できなかったのです。」

甲野さんが説明しますと、小林少年は、しばらく考えていましたが、

「ルミちゃんの人形は、運送屋がはこんできたのですね。おうちのかたで、その運送屋の名をおぼえている人はないでしょうか。」

「それは女中さんが知っているかもしれませぬ。」

そこで、女中さんたちを呼んでたずねてみますと、荷物をうけとつた女中さんは、運送屋が送り状をのこしていかなかったので、名まえはおぼえていないと答えましたが、もうひとりの女中さんが、たいへんものおぼえがよくて、トラックの横に大きく書いてあつた運送屋の名をおぼえていました。それは「木の宮^き運送店^{みや}」
というのでした。

「めずらしい名まえですから、同じ店がたくさんあるはずはありません。電話帳を見ればわかるでしょう。ぼくは、ともかくその運送店をさぐってみます。それから、明智先生に電話で相談したうえで、きょうのうちに、人形じいさんの家へしのびこんでみます。いまはまだ二時ですから、じゅうぶん時間があります。それ

には、このままの姿ではだめです。ぼく、女の子に変装します。そして、人形じいさんと知恵くらべをやるのです。」

てきぱきと、こともなげにいう小林君の顔を、甲野さんは感心して見つめていましたが、

「あんたが女の子にばけるんだって？ 相手に気づかれないように、そんな変装ができるかしら。」

と、心配らしくたずねました。

「だいじょうぶです。ぼく、なんどもやったことがあるんです。いつも、ばれたことはありません。ぼくのからだにあう女の子の洋服も和服も、いつでもつかえるように、事務所にちゃんと用意してあります。」

「それならいいが、いずれにしても、明智先生に電話で相談のう
えでやってくださいよ。もし、あいてに気づかれたら、ルミがど
んなことになるかわからないのだからね。わしのほうは、あすの
晩までに、一千万円の現金を用意しておきます。金をわたすのは、
すこしもおしいわけではない。ただ悪人をそのままほうっておく
のが残念なのです。それで、ルミをと리카えしたあとで、そいつ
をつかまえてやりたいのですよ。」

「わかりました。ですから、ぼくは、甲野さんとはなんの関係も
ないものとして、探偵します。お金を取りにくるじやまなどは、
けっしてしません。ただ、あいての住みかをつきとめておいて、
ルミちゃんが帰ってこられたあとで、警察に連絡するつもりです。

そして、つかまえてもらいます。」

「では、やってみてください。くれぐれも、あいてにさとられな
いようにね。」

そこで、小林少年はいとまをつげると、いそいで明智探偵事務
所へひきかえしました。

おばけやしき

小林少年は事務所に帰ると、木の宮運送店の住所をしらべ、電
話で明智探偵のおとなの助手を呼んで、その店をしらべてもらう
ことにしました。

なぜ、おとなの助手を呼んだかといいますと、こういうことは、警察の刑事だといってしらべたほうがうまくいくのですが、それには、子どもの小林君ではだめだからです。

おとなの助手は、刑事らしい服装をして杉並区すぎなみくの木の宮運送店にいき、今日の昼すぎに赤坂の甲野さんのうちへ、ほそ長い木箱をはこんだのは、だれにたのまれたのかとたずね、なんなくその人物の住所をききだしました。それは、おなじ杉並区の原っぱの中の一軒家に住んでいる、白ひげの老人で、みような人形ばかり作っている、かわりものだということでした。名まえは赤堀あかほりてっしゅう鉄州てっしゅうというのです。

それがわかったので、小林少年は、明智探偵の旅行さきの大坂

のホテルへ電話をかけて相談しますと、「よく注意して、やってみたまえ。」と、おゆるしが出ました。明智探偵も、小林君の腕まえをよく知っていたからです。

そこで小林君はかつらをつけ、おけしようにし、洋服をきて、十四―五歳のかわいい少女にばけてしまいました。そして自動車に乗って、助手に教えられた杉並区の一軒家へといそぐのです。そのころは、もう日ぐれに近くなっていました。

ずっとてまえで自動車をおりて、その原っぱへ近づいていきますと、むこうに、平家だてのこわれかかったような、古い西洋館が見えてきました。

板ばりに青いペンキがぬってあるのですが、そのペンキがほと

んどはげてしまつて、板もところどころくさつていようです。まわりには草がぼうぼうとはえ、どう見ても、おばけやしきという感じですよ。見ると、そのおばけやしきのほうから、ひとりの青年が自転車をひっぱつて、草の中を、こちらへ歩いてくるのです。牛乳屋のようでした。少女にばけた小林少年は、その青年が近づくのをもつて声をかけました。

「あのう、ちよつとうかがいます。」

すっかり女の声になっています。小林君は、なかなか名優でした。

青年は、かわいらしい少女に呼びかけられたので、にこにこして立ちどまりました。

「あの西洋館、赤堀鉄州という人の家でしょう？」

「ああ、そうだよ。このへんじゃあ、おばけやしきの、おひげさんといってるよ。気味のわるいじいさんだよ。」

「そのおじいさん、いま、家にいるでしょうか。」

「きのうからるすだよ。じいさんはひとりものだから、いま、あの家にはだあれもいやしないよ。おひげさんはかわりもので、ときどき、ふらふらつと、どこかへ出かけて、帰らないことがあるんだ。そのたんびに、牛乳をくさらせてしまう。ぼくの配達した牛乳が、きのうのままドアの外におきっぱなしになっているんだよ。」

青年は、なかなかおしやべりです。

「そのおじいさん、人形を作るのでしょうか？ それから、腹話術もできるんでしょう？」

「腹話術はどうか知らないけれど、人形は作るよ。あの家には、気味のわるい人形が、ウジャウジャいるよ。きみ、おひげさんを知っているの？ だが、あんな家に近よらないほうがいいよ。ひどいめにあうかもしれないよ。」

「ええ、あたし、いかないわ。お友だちにおじいさんのことをきいたものだから、ちよっとおたずねしただけよ。どうもありがとう。」

そして、西洋館とはんたいのほうへ歩きだしたので、青年も「さいなら！」と言って、自転車に乗り、あとをふりかえりなが

ら、むこうへ遠ざかっていきました。

少女の小林君は、青年の自転車が見えなくなるのを待って、ぶきみな西洋館のほうへひきかえました。

入口のドアに近よって、とつてをまわしてみると、ガチツと音がして、たやすく開いたではありませんか。

「おやつ、かぎもかけていないのかしら。」

と、おどろきながら、そつとのぞいて見ました。中はうす暗くて、いまにも、すみのほうから怪物があらわれそうな気がします。

さすがの小林君も、なんだか気味がわるくなって、しばらくためらっていました。ルミちゃんが、この家のどこかに閉じこめられているかもしれないと思うと、にわかには勇気が出てきました。

そのまま中にはいって、ドアをしめ、玄関をあがって、暗い廊下を奥のほうへ、しのび足で歩いていきます。

ところが、十歩も歩かないうちに、ギョツとして立ちどまりました。なにかしらやわらかいものが、サーツと、小林君の顔をなでたからです。

では、やっぱり人間がかくれていたのかと、きつと身がまえをしてよく見ますと、顔のまえに、長い髪の毛がさがっていることがわかりました。

それは人間の髪の毛でした。髪の毛の上に、女の顔があります。つまり、その女は、てんじょうからさかさまにぶらさがっていたのです。

白い着物をきて、たもとがだらんとたれています。顔はまつさ
おで、くちびるから赤い血が流れているのです。

その顔のものすごさに、小林君は、おもわず逃げだしそうにな
りましたが、ふと思いかえして、もう一度、じつと女の顔を見つ
めてみました。

「なあんだ、おばけ人形じゃないか。」

小林君は笑いだしました。それは、見せもののおばけやしきで、
てんじょうから見物の頭の上にとびついてくる、あの幽霊の人形
だったのです。

怪老人は、ぶきみな人形ばかり作っているというのですから、
廊下に幽霊人形がぶらさげてあっても、べつにふしぎではありま

せん。

そこをとおりすぎて二―三步いくと、ドアが開いていました。暗くてはつきりはわからないけれど、その中は広いアトリエのよな部屋で、むこうの壁ぎわに、奇怪な人形どもが、ウジャウジャ立っているらしいのです。

少女姿の小林君は、だいたんに、その広い部屋へは行っていきましました。

そばまでいってみますと、ウジャウジャと立っているのは、やっぱり人形でした。しかも、それがみんな、ゾツとするようなおばけ人形、幽霊人形ばかりなのです。

小林君は、それらの人形に、一つ一つさわってみました。ルミ

ちやんが、おぼけ人形の中に、かくされているかもしれないと考えたからです。

しかし、どれも、こちこちした人形ばかりで、生きた人間がかくされているようすありません。

人形どものまえに、大きな箱のようなものがおいてありました。よく見ると、それは、むかしのよろいびつでした。怪老人は、よろいをきた武士の人形なども作るのかもしれない。

大きなよろいびつですから、人間がかくれることもできます。

「もしや、この中にルミちゃんが……。」

と思うと、小林君は、胸がどきどきしてきました。

しばらくためらっていましたが、思いきって、よろいびつの重

いふたを両手で持ちあげ、中をのぞいてみました。

中はまっ暗ですが、なにもかくれているようすはありません。手をいれてさぐってみると、まったく、からっぽであることがわかりました。

それから、小林君は、そのアトリエの中を十分しらべたうえで、ほかの部屋もくまなくさがしまわりました。ほかの部屋といつても、せまい西洋館なので、古くさいベッドのおいてある部屋、物置きのような部屋、台所などでぜんぶでした。どの部屋にもかぎのかかった戸だななどは一つもなく、ルミちゃんのかくしてあるような場所は、まったく見あたらないのでした。

「ルミちゃん……ルミちゃん……おとうさんにたのまれて、さが

しにきたんだよ。もしいたら、安心してへんじをしなさい。きみを助けにきたんだから……。」

そんなふうに、いくども呼んでみましたが、なんのてごたえもありません。

「やっぱり、ほかの場所へかくしたんだな。それでなければ、入口にかぎもかけないでおくはずがない。」

小林君はそう思って、ルミちゃんをさがすのはあきらめました。が、このまま立ちさる気はありません。怪老人がいつ帰ってくるか、わからないのですから、どこかにかくれていて、老人の正体を見きわめてやろうと考えています。

すると、そのとき、入口のほうでボタンという音がして、こつ

こつと廊下を歩く足音が聞こえてきました。怪老人が帰ってきたのかもしれない。

小林君は、すばやくアトリエにかけこんで、さっきのよろいびつに近づくと、重いふたを持ちあげて、その中にうずくまり、じぶんでふたをしめました。

しかし、ピツタリしめてしまつては息ができませんので、手帳にはめてあつた鉛筆を、ふたのあいだにはさんで、すこしすきまを作つておいたのです。顔を横にすれば、そこから外をのぞくこともできます。

そうして、息をころして待っていますと、足音の主が、ひろま広間の
中へはいつてきました。

「電灯会社のやつ、いじの悪いまねをしやあがる。六カ月ぐらい料金がたまつたつて、なにも電灯線を切つてしまうことはないじやないか。だが、電灯なんかつかなくても、おれはへいきだぞ。ほら、ここにちやんと、ろうそくというものがある。これさえありや、べつに不自由はしないのさ。ウフフフ……。」

しわがれた老人の声です。そして、シュツとマツチをする音がしたかと思うと、あかちやけたろうそくの光が、よろいびつの中までさしこんできました。

小林君は、顔を横にして、すきまからのぞいてみました。

やっぱり白ひげの老人です。それが、ろうそくを胸のへんで持っているのです、下からの逆光線に照らされて、じつにもものすごい

顔に見えます。

やせこけたほお、高いワシ鼻^{ぼな}、太いまゆ、ギョロリとした目、大きな口、長い白ひげ、モジャモジャのしらが頭……。

服は、古ぼけた黒い背広のようです。

箱の中の少女

そのうすきみのわるいじいさんは、高いワシ鼻を、しきりにくんくんいわせて、においをかいでいましたが、やがて大きな口で、にやりと笑いました。

「おやつ、へんだぞ。だれかここへはいつてきたやつがあるな。」

くんくん……たしかにそうだ。おしろいのおいがする。女だな。」

そういつて、じろりと、よろいびつのほうを見ました。

少女にばけた小林君は、箱の中でギョツとして、首をちぢめました。

「さとられたかしら。でも、まさか、よろいびつの中とは気がつかないだろう。もうすこし、ようすをみてやろう。」

と、息をころしてのぞいていますと、怪老人はむこうへ歩いていて、道具箱をがたがたいわせていました。そこからなにかを取りだすと、またこちらへやってきました。そして、大きな口をいっばいにひらいて、いきなり笑いだすのでした。

「ワハハハ……うまいことを思いついたぞ。おれの知恵はどんなものだ！　ワハハハ……さあ、しごとだ、おもしろいしごとをはじめるぞ。ワハハハ……。」

じいさんは、気持ちがいのように笑っているのです。笑うたびに大きな口がぱくぱく動いて、黄色い歯がむきだしになり、そのあいだから、どす黒い舌が、へらへらとのぞくのです。それが下のほうから、ろうそくの光に照らされるのですから、その気味わるさといったらありません。

「しごとをするといつて、こいつは、いったい、どんなしごとをするんだらう。のんきらしく、彫ちようこく刻でもはじめるつもりだらうか？」

箱の中の小林君は、心の中でそんなことを考えながら、なおも見つめていますと、怪老人は、左手にろうそくを持ち、右手に大きな金づちをさげていることがわかりました。

老人は、背中をまるくして、まるでゴリラのようなかっこうで、よたよたと、こちらへ歩いていきましたが、よろいびつから二メートルほどのところへ近づくと、パツと、一とびによろいびつにとびかかり、その上に腰をおろしてしまいました。

「ワハハハ……しめたぞ。おい、中にいるやつ、おれの声が聞こえるかね。ワハハハ……おれが、よろいびつのすきまに気がつかないほど、のろまだと思っていたのかね？ おれの目は、ネコの目だよ。どんな小さなものでも、見のがしっこないのだ。」

おれがしごとをするといったのを、聞いていたかね。いったいなんのしごとだと思つたね？　ワハハハ……それはね、釘と金づちのしごとさ。つまり、きさまをいけどりにするしごとさ。ほら、こうするのだ。聞こえるかね？　これは、釘をうつ音だぜ。」

怪老人は、にくにくしくいいながら、よろいびつのふたに、長い釘をトントンとうちこみはじめました。さつき老人がふたの上にかしかけたとき、はさんであつた鉛筆がおれてしまったので、ふたはピッタリしまっています。老人は、それを上から釘づけにしようとしているのです。

「ワハハハ……。中にかくれているのは、若い女の子らしいね。女探偵かね。女のくせにだいたんなやつだ。おれは、女の子には

やさしくするほうだが、おれの秘密をさぐりにきた女探偵とあつては、しようちができない。こうして閉じこめてしまうのだ！」

小林君は、しまったと思いました。さつき老人が金づちを持っているのを見たとき、なぜ気がつかなかったのでしょうか。あのとき箱からとびだしてしまえば、こんなめにあわなくてもすんだのです。

こんながんじょうなよろいびつの中へ閉じこめられたら、息がつまって死んでしまえばかりです。

小林君は、ありつたけの声をふりしぼって叫びました。

「あたし、探偵じゃないのよ。中学生なのよ。原っぱで遊んでいて、うっかりここへはいつてきたのよ。あけて！ でないと、お

友だちがさがしにくるわよ。そして、あたしのおとうさんに知らせるわよ。」

小林君は、こんなさいにも、少女にばけていることをわすれないのでした。

「ウフフフ……、なにかいってるね。やっぱり女の声だね。しかし、なにをいつているのか、すこしもわからないよ。こうして釘をうってしまえば、いくら叫んでも、もう聞こえやしないのだ。」

小林君は、力をこめて、ふたをおしあげようとしてましたが、じいさんが上に乗っかっているので、びくとも動きません。そうしているうちにも、釘は二本、三本、四本と、みるみるうちにうちこまれていくのです。

小林君は、全身の力をふるって、箱の中であばれまわり、叫びたてましたが、なんのかいもありません。ふたは、完全に釘づけにされてしまいました。

かたな
刀のきつさき

小林君は、あんまりあばれたので、のどがからからにかわいて、心臓がおそろしい早さでうっています。いや、それよりも、なんだか息が苦しくなってきました。むかしの職人が作ったがんじょうなよろいびつですから、ふたをしめると、空気がまったくかわわなくなってしまうのです。

すっかり釘をうってしまった怪老人は、立ちあがって、

「ワハハハ……これでよしと。さて、きさまのもがく音でも聞きながら、それをさかなに、いっぱいやるとしようか。」

といいながら、部屋のすみからウイスキーのびんとコップを持ってきて、よろいびつの上に、どっかりと腰をおろし、ウイスキーを、ちびりちびりと飲みはじめました。

「ワハハハ……まだあばれているな。女の子にしちやあ、なかなか、しゅうねん深いぞ。だが、いくらあばれたって、この箱がびくともするものか。ワハハハ……。」

じいさんは、ひっきりなしにウイスキーを飲みながら、気持ちがこのように、とんきような声で笑いつづけるのです。

箱の中の小林君は、だんだん息ぐるしさがひどくなってきました。とうとう、このまま死んでしまうのかと思うと、残念でたまりません。さすがの少年名探偵も、まっ暗な箱の中で泣きだしたくなってきました。

もうすっかり、よっぱらってしまった老人は、またなにか、わけのわからぬことを、しゃべりだしました。

「だが、待てよ。このままではおもしろくないぞ。ああそうだ。おい、おじょうさん、おれはいいことを思いついたぞ。待て待て、いま、きさまを樂にしてやるからな。ちよつとのがまんだ。すぐ樂になるぞ。ワハハハ……。」

そういつて、じいさんは、よろよろと立ちあがりました。

箱の中の小林君は、かすかに、「楽にしてやるぞ。」という声
が聞こえ、老人が立ちあがったようすなので、思わずギョツとし
て耳をすましました。

「楽にしてやる。」とは、いったい、どういう意味でしょう。

「もしや、あいつは、ぼくを殺すつもりじゃないかしら？ そう
だ、きつとそうだ。ただ箱の中へ閉じこめただけでは、きゆうに
は死なないから、なにか、もつと早く殺すことを思いついたのに
ちがいない。」

小林君は、そう思うと、ゾーツとして、心臓がとまってしま
うような気がしました。

怪老人のかすかな足音が、よろいびつのそばをはなれて、どこ

かへ遠ざかっていきましたが、まもなく、またもどってきました。楽にする道具をとりにつたのにちがいありません。

「ピストルじゃないかしら。あいつは、箱の外からいきなりピストルをうって、ぼくを殺すのじゃないかしら。」

小林君の全身から、つめたい汗がにじみだしてきました。

「あいつは気ちがいだ。あいつの目は、気ちがいの目だ。殺人狂にちがいない。」

小林君は、もうかくごをきめました。いまにも、パンと音がして箱の横っぱらに穴があき、じぶんの胸へ、なまりのたまがとびこんでくるのだと、かんねんしました。

「明智先生！」

思わず、なつかしい先生の名を呼びました。にこやかな先生の顔が、まぶたの中に、はつきり浮かんできました。

しかし、どうしたのでしょうか。かくごをしていたピストルの音は、いつまでたつても聞こえないではありませんか。

そのかわりに、ごしごしと板をひつかくような音が、聞こえてきました。そして、そのたびに、よろいびつが、かすかにゆれるのです。

ああ、わかりました。なにかで、よろいびつの外がわを、こすっているのです。いや、穴をあけようとしているのです。きつと、するどい刃はものでしょう。刀かもしれませぬ。むかしの長い刀のきつさきで、板をこしこすっているのです。

「ああ、そうだったのか。ピストルではなくて、刀だったのか。気がいいじいさんは、刀でぼくをつき殺そうとしているのだな！」

そのとき、小林君のまぶたの中に、ふしぎなものが浮かんできました。ずっとまえに見た、奇術の舞台です。ちようど、このよろいびつのような四角な箱の中へ、ひとりの少女が閉じこめられるのです。

そこへ、西洋の魔法つかいのようなかっこうをした奇術師が、ピカピカ光る長い剣けんを、七―八本もかかえてあらわれます。そして奇術師は、この剣を一本一本、四方から箱の中へつきとおすのです。

見物人には、箱の中の少女が、たくさんの剣でつき殺されたよ

うに見えます。箱の中からは、少女のかなしい叫び声が、見物人のたましいを、ゆすぶるように聞こえてくるのです。

「あれだ。いまにぼくは、あれとそっくりのめに、あわされるのだ！」

ギリギリという刃ものの音は、だんだん箱の板にくいこんでいきます。やがて、するどいきつさきが、あらわれるでしょう。しかし、小林君のからだは、箱の中いっぱいになっているので、身をかかわすすきまはありません。きつさきは、まともに胸をつきとおすにちがいないのです。

小林君は、もうたまらなくなつて、あの奇術の少女のように、かなしい叫び声をあげようかと思いました。

そのとき、ブツツと音がして、箱の板に穴があきました。暗く
てよくはわかりませんが、刀のきつききのようなのが、すぐ目
の前にあらわれたのです。

小林君は、ハツとして目をつぶりました。もう殺されたと思っ
ました。ところが、ふしぎなことに、どこもいたくはないのです。
いつまでたつても、なにごともしません。

目を開いてみると、板に大きな穴があいて、そこから、ろうそ
くの光がさしこんでいました。むろん、そこから空気もはいつて
くるわけです。気のせいか、いくらか、息が楽になったようです。
「ワハハハハ……おじようさん、びつくりしているね。殺される
と思ったのかね？　ワハハハ……まだ殺さないよ。ちよいと、寿^じ

ゆみよう

命をのぼしてやったのさ。息がつかまって死んでしまっっちゃあ、おもしろくないからね。息ぬきの穴をこしらえてやったのさ。どうだ、おれの声がよく聞こえるだろう？」

いかにも、怪老人のしわがれ声が、いままでよりはつきり聞こえます。酒くさい老人の息のにおいさえ、ただよってくるのです。

赤いほのお

「ねえ、おじいさん、いったいあたしを、どうしようっていうの？」

小林君は、あくまで女の声で、板の穴に口をよせるようにして

叫ぶのでした。すると、よつぱらいじいさんのわめき声が、答えました。

「ワハハハ……心配かね？　なあに、おまえを取って食おうとは
いわないよ。ただね、ちよつと酒のさかなにするまでさ。おまえ
の声が聞こえなくては、酒がうまくないからね。ワハハハハ……
」

怪老人は、またよろいびつにこしかけて、ピチャピチャと、舌
なめずりをしながら、ウイスキーを飲みはじめました。一口飲ん
では、わけのわからないことを、しゃべりちらすのです。そして、
とほうもない笑い声をたてるのです。はじめから気ちがいみたい
なやつが、すっかり、よつぱらったのですから、いうことは、め

ちやめちやでした。

小林君は、ばかばかしくなつて、口をつぐんでしまいました。よつぱらいになにをいっても、むだだと思つたからです。

怪老人は、それから三十分ほども、いいたいままの悪口をたたいていましたが、そのうちに、だんだん、ろれつがまわらなくなり、ことばのほかにも、みような音がまじるようになってきました。いびきです。箱にこしかけたまま、いびきをかきはじめたのです。とつぜん、ガチャンとガラスのわれる音がしました。手に持つていたウイスキーのびんか、コップが、床に落ちたのでしよう。まもなく、どしんと大きなひびきをたてて、怪老人が、箱からころがり落ちました。そして、あとは、しいんとしずまりかえつ

たアトリエの中に、老人のいびきの音だけがつついていました。

じいさんはとうとう、よいつぶれてしまったのです。小林君は、このまに逃げださなければと思いました。そして、ありったけの力をふるって、頭と肩で箱のふたをおしあげようと思いました。

しかし、がんじょうなよろいびつは、びくともしません。なんどもなんども、ぶつつかっているうちに釘がゆるんで、ふたがいくらか持ちあがったように思われましたが、小林君はもう力がつきて、ぐったりとなつてしまいました。

そうしてじつとしていきますと、箱の外で、かすかな音がしているのに気がつきました。老人が目をさましたのかと思いましたが、いびきは、あいかわらず聞こえているのです。そのいびきにまじ

って、もつとべつの、かすかな音をたてているものがあるのです。老人のほかに、なにもものかがいるのです。それにしても、いつのまに、だれがはいってきたのでしょうか。ごそごそと動く音のほかに、かすかな息づかいさえ聞こえてくるではありませんか。

小林君はゾーツとしました。アトリエの中へ、老人とはべつなものかがしのびこんで、こつそりと、なにかやっているのです。人間でしょうか。それとも、人間よりも、もつと恐ろしいやつでしょうか。

じつと息をころして、聞き耳をたてていますと、やがて、そのかすかな音はやんでしまいました。べつに立ちさった足音も聞こえません。うす暗い部屋のすみに、じつと、うずくまっている

のかもしれない。しかし、なんのために？ ああ、いったいな
んのために？

小林君は、どうしていいのかわかりません。しのびこんできた
やつに、声をかけようかとも思いましたが、もし怪老人の仲間だ
ったら、たいへんです。

ためらっているうちに、時間がたつていきました。しかし、い
くら待っても、さっきのあやしい音は、もう聞こえてきません。
老人のいびきのほかは、しんと、しずまりかえています。

まっ暗なせまい箱の中で、じつとしているのは、じつにへんな
気持です。やがて、小林君はまた、きみようなもの音に気づきま
した。こんどは、人間が動いている音ではありません。パチパチ

と、なにかがはぜるような音です。

そのうちに、へんなにおいが箱の中までただよってきました。もののこげるにおいです。では、あのかすかな、パチパチという音は、火が燃えているのでしうか。

ああ、たしかにそうです。こげるにおいは、だんだん強くなってきました。パチパチとはぜる音は、いよいよはげしくなってきました。

そればかりではありません。箱の穴から、スーツと白い煙がはいこんできました。

煙はますますこくなり、むせつぽくなってきました。そして箱の穴に、ろうそくの光とはちがった、ぶきみな赤い光が、ちろち

ろとまたたき、箱のまわりが、みように熱くなってきたではありませんか。火事です。アトリエが火につつまれているのです。

どうして火事がおこったのでしょうか。よっぱらいの老人が、ろうそくをたおして、その火が燃えうつつたのでしょうか。いや、そうではなさそうです。さっきのかすかなもの音、なにもものかがしのびこんできたようなもの音が、あやしいのです。

火の海

箱の中の小林君は、気ちがいのようにあばれました。死にものぐるいの力で、めちやめちやに、もがきまわったのです。

肩や、ひじや、ひぎに、かすりきずができて、血が流れてきました。しかし、そんなことにかまっているひまはありません。めつたむしのように、あばれつづけているうちに、死にものぐるいの力はおそろしいもので、さしもがなじようなよろいびつも、めりめりと音をたててこわれはじめました。いや、こわれるよりもさきに、ふたにうちつけてあつた釘がゆるんで、パツとふたが開いたのです。そして小林君は、よろいびつの中に立ちあがってしまいました。

見ると、あたりはいちめんの火の海でした。部屋じゆうに、煙がもうもうとうずまき、一方の壁は半分焼け落ちて、まつかなほのおが、何千ともしれぬ毒蛇どくじやの舌のように、めらめらとてんじ

ようをなめていました。床には黄色い煙がはいまわり、そのあいだから赤いほのおが、バツ、バツと音をたてて燃えあがっていました。

老人はと見ると、その煙の中にたおれたまま、むせかえりながら、ごろごろと、イモ虫のようにならげまわっています。よつぱらつて、足が立たないのでしょうか。いや、そうではありません。いつのまにだれがしばったのか、老人は、手も足も、あぎ縄なわで、ぐるぐるまきにしばられているのです。

いくら悪人でも、焼け死ぬのをほうっておくわけにはいきません。それに、さいわい手足をしばられているのですから、助けだしたところで、逃げられる心配はないのです。

小林君は、力まかせに老人の足をひきずって、床の燃えていないところをえらびながら、部屋の外へ出ました。廊下はまだ燃えていません。やっぱり老人の足をひきずったまま、廊下から入口のドアの外へ。そして、たてもものから、ずっとへだたった草の中へ老人を寝かせました。そして小林君は、いきなり町のほうへかけだすのでした。

いつのまにか日がくれて、外はまっ暗になっていました。しかし、まだよいのうちですから、町のたばこ屋は店をひらいていました。

小林君は、そこへとびこんでいきました。

「あのおばけやしきの西洋館が火事です！」

と叫んでおいて、赤電話の受話器をとると、まず、一一九をまわして、火事の場合を知らせたあとで、警視庁の捜査課を呼びだし、知りあいの中^{なかむら}村警部に、いそいで、ことのしだいをつけました。明智探偵は旅行中なので、さしずめ、中村警部の助けをもとめるほかはなかつたのです。

すぐに現場へいくという中村警部のへんじをきいて、小林君は、怪老人をころがしておいたところへ、とつてかえしました。もうそのころには、近所の人たちが原っぱへ集まってきて、いっばいの人ばかりになっていました。

怪老人は、もとの場所にころがっていました。もういびきはかいていません。けれど、ぐったりと死んだようになってたおれて

います。

そのときはもう、西洋館ぜんたいがまっかなほのおにつつまれていました。何千何万ともしれない赤いヘビが、のきをつたい、やねにはいあがり、やみの空にのぼろうとでもするようにな、あれくるっていました。

そのとき、するどいサイレンの音をひびかせて、消防自動車がやってきました。たちまちホースが何本ものばされ、燃えくるう西洋館に、ふんすいのように水がそそぎかけられました。もう西洋館を助けることはできません。建物ぜんたいに火がまわってしまつたからです。

西洋館をかこむ木立ちは、絵のぐをぬつたように、まっかにい

ろどられていました。そして、えたいのしれないぶきみな風が、そのへんいったいを、くるいまわり、もくもくと上がる黄色い毒ど煙くえんを、右に左にあおっていました。

そのとき、じつにふしぎなことが起こったのです。そのうずまく煙の中から、材木のはぜわれる音にまじって、異様な声が聞こえてきました。ほのおにたわむれる怪かいちよう鳥ちょうのなき声でしょうか。いやいや、そうではありません。鳥が笑うはずはないのです。それは、気がいのような人間の笑い声でした。ほのおと煙のむこうがわから、なにものかが、人の不幸をよろこぶように、笑いくるっていたのです。

ああ、こののろわれた笑い声には、いったい、どういいういみが

あつたのでしょうか。

きみのような問答

その夜ふけ、あかほりてつしゆう赤堀鉄州老人は、杉並警察署のしらべ室で、署長と、警視庁の中村警部と、二―三人の刑事たちにとりまかれていました。老人は、手足の縄をとかれ、木のいすにかけさせられていたのです。

酒のよいもさめて正気にかえった怪老人は、まるでキツネにつままれたような、とんきような顔で、キョロキョロとみんなの顔を見まわしていました。

「きみのうちは、すっかり燃えてしまったんだぞ。いったい、どうしてじぶんの家へ火をつけたんだ？」

杉並署の部長刑事が、老人の顔をのぞきこみながら、おどかすようにいいました。

「火をつけた？ そんなばかなことが。……あつ、そうだ。おれは焼き殺されるところだった。おれはだれかにしばらくられて、ころがされていた。だが、どうして助かったのだらう。あつ、そうだ。だれかがおれの足をひっぱって、助けだしてくれたんだ。」

「そうとも。ほうっておいたら、きみはいまごろ黒こげになっていたんだぞ。」

それを聞くと、怪老人の顔に、異様な恐怖の色が浮かびました。

青ざめていた顔がいつそう灰色になって、ぶきみな大きな目が、とびだすほど見ひらかれ、鼻のあたまに、びっしより汗がわいてきました。

「いけないっ！ たいへんだっ！ おれはすっかりわすれていた。おれは人を殺してしまった！」

老人は、わけのわからないことをわめきだしました。

「おい、しつかりしろ。なにをいつているんだ。だれを殺したというのだ。」

「女だ。かわいい女の子だ。おれのアトリエへしのびこんで、よろいびつの中にかくれていたので、上から釘をうって出られなくしてしまったのだ。そしておれは酒を飲んだ。ずいぶん飲んだ。」

なにがなんだかわからなくなってしまった。あの女の子は、よろいびつに閉じこめたままだ。おい、きみたち、火事場のあとに、人間の死体が見つからなかったか？ ああ、おれはたいへんなことをしてしまった。え、きみ、どうだった？ 死体はなかったか？ それとも、あのよろいびつを、だれかはこびだしてくれたのか。きみ、そいつをしらべてくれ。ああ、たいへんなことになったぞ。」

どうも、しらばついているのではなさそうでした。赤堀鉄州という、このきみのような老人は、ほんとうに、少女の身のうえを心配しているようでした。

「ハハハ……安心しろ！ きみがよろいびつに閉じこめた女の子

は、ちゃんどこにいる。さあ、よく見るがいい。」

部長刑事はそういつて、みんなのうしろに立っていた、少女姿の小林少年を呼びだして、老人の前に立たせました。

「あつ、そうだ。この子だ。ふしぎだなあ。おまえはどうして助かったのだ。……だが、待てよ。あつ、いけない。おい、きみたち、こいつはどろぼうだぞ！ おれの家へしのびこんだ。あきす空巢ねらいだ。そうでなくて、よろいびつなんかに、かくれるはずがない。きみたち、こいつをつかまえて、縄をかけてくれっ！」

怪老人は、そばに立っていた刑事にむしやぶりついて、わめきたてました。それを見ると、中村警部が、はじめて口を開きました。

「なにをいつているのだ。この子は、どろぼうどころか、有名な私立探偵だよ。」

「なにつ、こんな小さな女の子が、私立探偵だつて？」

怪老人の大きな目が、またとびだすほど見ひらかれました。

「小林君、かつらをとつて、すぐおを見せてやりたまえ……。これは、ほんとうは男の子なんだよ。名探偵明智小五郎の有名な少年助手、小林芳雄君だよ。」

小林少年は、すつぽりと、かつらをとつて見せました。すると、その下から、少年の頭があらわれたではありませんか。

「あつ、それじゃ、きみは男の子だったのか。うん、知っている。

小林という少年助手のことは、新聞で読んで知っている。そうい

えば、新聞の写真とそっくりの顔だ。だが、それにしても、きみはなぜ、おれのアトリエへしのびこんだのだ。しかも、女の子にばけたりして……。」

どうも、ようすがおかしいのです。もしこの老人が、甲野ルミちゃんをさらって、身のしろ金をゆすった本人だとすれば、こんなことを、ぬけぬけといえるはずがないではありませんか。

怪老人の正体

それからまた、部長刑事と怪老人の問答がつづきました。

小林君は、甲野さんから、ルミちゃんの事件は、警察に知らせ

ないようにといわれていましたが、もうこうなったら、かくすわけにはいきません。中村警部にすっかり話してしまいました。杉並署の署長や部長刑事も、中村警部からそれを聞いて、なにもかも知っているのです。

「きみは、赤堀鉄州という人形師だね。」

部長刑事が、怪老人をにらみつけてたずねました。

「そうだよ。おれはおばけ人形をつくる名人だよ。」

「赤坂の甲野光雄という金持ちを、知っているだろう？」

「ふうん、聞いたような名だが、べつに知りあいではないね。」

「まだしらばついているな。きみは、その甲野さんのむすめの、ルミちゃんという、かわいい女の子を、さらっただろう。」

「さらった？ おれがかね。」

「そうだよ。そして、ルミちゃんとそっくりの人形を木の箱に入れて、甲野さんの家へ、運送屋にとどけさせただろう。」

それを聞くと、赤堀老人は、びっくりしたように目をむきましました。

「とんでもない、おれは、そんなこと、まるで知らないよ。」

「だが、こちらには、ちゃんと証人があるんだぜ。木の宮運送店の店員だ。その店員は、たしかに赤堀鉄州という人形師にたのまれて、木箱をはこんだといっている。」

「それじゃあ、その店員にあわせてもらいたいもんだね。顔を見れば、おれか、おれでないか、すぐにわかることだ。」

老人のびっくりしたようすが、真にせまっついていて、どうも芝居らしくないので、中村警部と署長は、いぶかしげに顔を見あわせました。

「それじゃ、木の宮の店員を呼びだすことにしよう。そのあいだに、ルミちゃんの事件を、このじいさんに話してやりたまえ。」

署長が部長刑事に命じました。そして、ひとりの刑事が運送店へ出かけていくのでした。部長刑事は、公園でルミちゃんがさらわれたことから、電話で一千万円の身のしろ金をゆすつてきたこと、運送屋がルミちゃん人形をとどけたこと、小林少年が、運送屋から赤堀老人の西洋館をききだして、女の子に変装して、そこへしのびこんだことなどを、すっかり話してきかせました。

「うーん、そういうわけだったのですか。それで、女の子がよろいびつにかくれていたわけがわかりましたよ。そうとは知らぬものですから、あんなひどいめにあわせてごめんなさいよ、小林君。」

老人はにわかになんていねいなことばになって、そこに立っている小林少年に、すまないという顔をして見せるのでした。

「いや。そればかりじゃない。手足をしばられて、焼け死ぬばかりになっていたわしを、きみが、火事場から救いだしてくれましたね。どうもすまんことをしました。かんべんしてください。まったくどろぼうだと思いきんでいたので、ああして、よろいびつに閉じこめて、あとで警察へひきわたすつもりだったのです。」

きみ、どうか、かんべんしてくださいよ。」

そういつて、いかにもはずかしそうにしているのを見ると、アトリエでろうそくの光をうけて、恐ろしい悪人にみえた顔が、みようにおどけた、こっけいな感じにかわつてきました。

小林君は、なんだか老人がかわいそうになりましたが、どうしても、たしかめたいことがあつたので、それをたずねてみました。

「そういえば、ぼくにも、ふにおちないことがあるんですよ。アトリエが火事になったとき、あんたは、よいつぶれたまま縄なわでしばられていた。ぼくは、よろいびつの中にいたので、だれがしばったかわからないのです。まさかじぶんで、じぶんをしばったわけではないでしょう。だれがしばったのか思いだせませんか。」

すると、老人は頭をかいて、

「じつにだらしのない話だが、わしは、なにもおぼえていないのです。寝ている間に、だれかにしばらくいられてしまったのです。」

といったまま、考えこんでしまいました。

そのとき、さつき出ていった刑事が、木の宮運送店の店員をつれてはいつてきました。

「きみにあの木箱の配達をたのんだのは、この人ではないかね。」
部長刑事が、店員を老人の前に呼んでたずねました。

「ちがいます。やっぱり白いひげをはやしていましたが、この人とはちがいます。」

店員は、一目見て、きつぱりといいきりました。

「だが、赤堀鉄州という人形師は、この人だよ。きみの店へ配達をたのんだのも、赤堀鉄州だったね。」

「そうです。名まえはそうでしたが、そのときの人は、この人じやありません。」

これで、赤堀老人のうたがいはれたわけです。

「待つてくださいよ。これには、なにか深いわけがありそうですよ。」

老人は、しきりに首をふりながら、ゆつくりしやべりはじめました。

「まあ、聞いてください。そのルミちゃんとかの人形を送ったのは、むろん、わしではありません。そいつは、わしの名まえをか

たったのです。そして犯人はこのわしだと思いこませておいて、ほんとうのことがわからないうちに、わしを焼き殺そうとしたのです。

そいつは、わしがよいつぶれていたのをさいわいに、身うごきができぬようにしばっておいて、アトリエに火をつけたのです。そうだ。それにちがいない。そうして、わしが焼け死んでしまえば、死人に口なしで、わしが犯人だったということになって、じぶんには、うたがいがかからない。ちくしようめ、うまく考えやがったな。」

「待ちたまえ。犯人は、あすの晩、身のしろ金を、甲野さんのところへ取りにくるといつているんだぜ。いま犯人が死んだことに

なれば、身のしろ金が取れないじゃないか。」

部長刑事が、よこやりを入れました。

「うーん。それもそうだが、そこにはまた、べつのがあるかもしれない。ルミちゃんという女の子はまだ発見されていないのだから、その子をだいじにかくしておいて、すこし日がたつてから、さもじぶんがみつけたような顔をして、甲野さんのところへつれていくというでもある。そのじぶんには、きつと懸賞金がついていますよ。一千万円というわけにはいくまいが、そうとうの金をせしめることができる。どうです、この考えは？」

いや、ルミちゃんさえかくしておけば、ほかにまだ、いろいろなやりかたがあります。犯人と悪いこまれたわしが死んでしまっ

て、ルミちゃんのかくし場所がわからないとなると、これはたいへんなさわぎになりますよ。そこで、真犯人のほうでも、いろいろなてが考えだせるといふものです。」

老人は、とくいらしく、しゃべりつづけるのでした。

「すると、きみが白ひげをはやした人形師で、真犯人とよく似ていたので、かえだまにつかわれたというわけだね。とすれば、同じ人形師のなかまのことだから、きみには、その真犯人の心あたりがありそうだね。きみとよく似た人形師といえば、いったいだれだろうね。」

部長刑事がたずねますと、赤堀老人は首をふって、

「ところが、そういう心あたりは、まったくくないのです。じつに

ふしぎですよ。しかし、わしも、そいつに焼き殺されかけたので
すから、なんとしても、かたきがうちたい……。ねえ、小林君。
わしをひとつ、明智先生に紹介してくださいませんか。わしは先生に
弟子入りしますよ。そうして、警察と力をあわせて、真犯人をさ
がしだします。きつと、さがしだしてお目にかける。ねえ、小林
君、どうかわしを先生にひきあわせてください。」

老人は、しんけんになって小林少年にたのむのでした。

人形むすめ

さて、よく日の朝のことです。甲野さんの家では、大きわぎが

おこっていました。女中さんが、ルミちゃんの寝室へなにげなくはいってみますと、ベッドの上に、ルミちゃんが、すやすや眠っていたではありませんか。ゆくえの知れなかったルミちゃんが、いつのまにか、家へ帰っていたのです。

女中さんの知らせで、おとうさんやおかあさんが寝室へかけてきました。ルミちゃんは、いくら起こしても目をさましません。いそいそお医者さまを呼んで見てもらいますと、ねむり薬を飲まされていることがわかりました。なにものかが、ルミちゃんをねむり薬で眠らせておいて、夜のうちに、ここへはこんできたのにちがいありません。

ルミちゃんのおとうさんの甲野さんは、そのとき、やっと気が

ついて、いそいで書齋へ行って、机のひきだしをしらべてみました。

ああ、やっぱりそうでした。机の右がわの三つのひきだしへ入れておいた、たくさんの札たばが、すっかりなくなっていたのです。あの怪老人は、約束のとおりルミちゃんをかえして、一千万円の札たばを持っていってしまったのです。

甲野さんは小林少年と相談したうえで、このことを警察にとどけました。すると、すぐに警官がやってきて、眠りからさめたるミちゃんに聞きただし、怪老人の住みかをさがして、とうとう、あの西洋館を見つけたしましたが、そのときには、怪老人は、早くもどこかへ、姿をくらましたあとでした。

たくさんの人形も、ふり袖姿の紅子さんも、みんないなくなつて、その西洋館は、がらんとした空家になつていたのです。

×

×

×

それから一月ほどは、なにごともなくすぎさりしました。警察は、怪老人の捜索をつづけていましたが、なんの手がかりも見つかりません。明智探偵は、事件の四日あとに大阪から帰って、小林君に、くわしい話を聞きました。

しかし、ルミちゃんが帰って、ともかく事件はおわたたのですから、怪老人が、また、なにか悪だくみをするまでは、手がかりのつかみようがないのです。

ところが、その一月ほどたったある日のこと、渋谷区の神山^{かみやま}さんの家に、みょうなことがおこっていました。

神山さんは、銀座の宝^{ほうぎ}玉^{よく}堂^{どう}という宝石商の社長で、渋谷駅から一キロほどのやしき町に、りっぱな西洋館の邸宅を持っていました。

神山さんには、中学一年生の進^{しん}一^{いち}君と、小学校五年生のサナエちゃんという、ふたりのこどもがありました。そのふたりが、いまサナエちゃんの部屋で、なにかいいあらそっているのです。「サナエの人形きちがい！ そんなに人形ばかりだいじにしてると、いまにおまえも人形になっちゃうぞ！」

進一君が、妹をからかいました。

「いいわよ、にいさんのいじわる！ この人形がみんなあたしの味方だから、にいさんなんか、いくらいじめたつてへいきよ！」

人形きちがいといわれるのも、もつともでした。その部屋には、壁いっぱいガラス戸だながあつて、その中に、ありとあらゆる人形が飾つてあるのです。

サナエちゃんは、四つぐらいのときから、人形がすきでたまらなくなつては、おねだりをして買つてもらつた人形が、いつのまにか、こんなにあつたつてしまつたのです。

おとうさんやおじさんたちが旅行のおみやげにくださつた、いろいろの地方の人形が、こけし人形をはじめとして、ウジャウジャならんでいます。

すこし大きいのでは、かぶき人形、なよなよとした姿のロマン
ス人形、目の青い西洋人形、船長のおじさんにもらったイタリ
アの大理石人形、京都できのかわいいさんぱち人形、ミルクを飲
む人形、寝かすと、「おぎやあ。」となく赤ちゃん人形。もつと大
きいのでは、文^{ぶんらく}楽人形のおひめさま、サナエちゃんと同じくら
いの大きさの西洋の少女人形、電気で動くロボット人形まで、か
ずかぎりもなくならんでいるのです。

サナエちゃんの人形ずきは、学校でも近所でもひよようばんで、
「人形むすめ」という、あだなさえついていました。

にいさんの進一君は、サナエちゃんがそんなにたくさん人形を
持っているのが、うらやましいのです。でも、男の子が人形なん

か集めるわけにはいきませんから、負けおしみで「人形きちがい
。」なんてからかうのです。

「にいさんだつて、探偵きちがいだわ。名探偵、明智小五郎の弟
子だなんて、いばっているんですもの。明智探偵にあつたことも
ないくせに！」

「なんだと？ なまいきいうな。明智先生には二度もあつてるよ。
話をしたこともあるんだよ。ぼくは少年探偵団の団員だからね。」

団長の小林さんは、明智先生の弟子だから、団員のぼくらだつて
弟子なんだよ。ほら、このB・Dバッジを見ろ！ これを持って
いるのが少年探偵団員の証拠じゃないか、ワイイ、ざまをみる！」
進一君は、ポケットから、ピカピカ光ったB・Dバッジをひと

にぎりとりだして、ジャラジャラと音をさせながら、サナエちゃん
の鼻の先へつきつけて見せるのでした。

そのとき、ドアが開いて女中さんが顔を出しました。

「サナエちゃん、玄関へ、へんな人がきましたよ。大きな美しい
人形を売りにきたらしいのです。それはすばらしい人形よ。おく
さまが、その人と話していらつしやるの。いってごらんさい。」

人形と聞くとサナエちゃんは、もう夢中です。パツといすから
とびあがると、ばたばたと、玄関のほうへかけだしていきました。

「ほんとうに人形むすめだなあ！ ぼく、たまげたよ。」

進一君は、あきれたようにつぶやきましたが、そのくせ、じぶ
んもじつとしていられなくなって、サナエちゃんのあとから、の

このことついていくのでした。

あやしい男

いってみますと、玄関のホールの板の間に、やせた背の高い男が、目もさめるような、美しい女の人形をだいて立っていました。おかあさんが、すみのほうから、あきれたように見つめています。男は黒い服を着ていました。まん中からわけた髪の毛が、気味わるいほどまつ黒です。高いワシ鼻の下に、ぴんとはねた黒いひげがはえていて、ものをいうたびに、それがぴくぴく動くのです。

みようにキラキラ光る目、さかだつたまゆげ。ひたいには、何本も横じわがきざまれています。若いのか、年よりなのか、見れば見るほどわからなくなるような、気味のわるい男です。

サナエちゃんが出てきたのを見ると、男は、にやにや笑いながら話しかけました。

「ああ、そこへおいでになったのは、おじようさまですね。おじさんは、ちゃんと知っていますよ。あなたは人形がだいすきでしょう。人形をどっさりお持ちですってね。しかし、こんなにつばな人形はありますまい。え？ どうです？ ごらんなさい。まるで生きてるようじゃありませんか。あなたのおねえさまに、ちようどよろしいですよ。この人形はね、ユリ子といいましたね、ひ

とつ、おどらせてお目にかけてみましょうか。」

男は、だいていた人形をじぶんの前に立たせ、うしろから、両手を人形のわきの下に入れて、おどりをおどらせるのでした。

人形は十五―六の美しいむすめさんでした。きれいな髪かざりをつけ、はでなゆうぜんのかぶり袖に、きんらんの帯をしめ、うつとりするような、かわいらしい顔をしていました。

その人形が、両手をしなやかに動かし、ふり袖をひらひらさせて、おどっているのです。ほんとうに生きているようです。おどりにつれて、顔も動き、こちらを見て、にっこり笑ったように思われました。

サナエちゃんは、いつかおとうさんにつれられて、文楽の人形

を見にいったことがあります。あの文楽の人形のおどりと、よくにているのです。いや、あれよりもっといきいきして、まるで、生きた人間がおどっているように見えるのです。

「おかあさま、あれ売りにきたの？」

サナエちゃんは、もう、ほしくてたまらないという顔で、おかあさんを見あげました。

「ええ、そうよ。」

「あたし、ほしいわ。こんなすばらしい人形、見たことないわ。」
すると男は、早くもそれを聞きつけて、おどりの手をとめると、
「おじようさま、お気にいりましたか？　おかあさまにおねだりなさい。きつと買ってくださいますよ。こんなにっばな人形が、

たった一万円なのです。衣装だけでも、三万円の値打ちはありますよ。おくさま、いかがです。おじようさまが、あんなにほしうにしていらっしゃるじやありませんか。」

十五―六歳のむすめと同じ大きさで、ほんもののゆうぜん着物に、ほんもののきんらんの帯をしめているのですから、一万円とは、おそろしく安いねだんです。

「では、おとうさまにおたのみしてあげましょう。」

おかあさんは、そういつて奥へはいつていきましたが、じきにもどつてきて、その人形を買いとることにしました。

「おじようさまのお部屋まで、持ってまいります。そして、おじようさまのお集めになった人形を、拝見したいものでござい

ます。」

男はそういつて、また、にやりと笑いました。

サナエちゃんは、人形が手にはいることになったので、もう夢中です。気味のわるさもわすれて、その異様な男を案内して、じぶんの部屋へいそぐのでした。

部屋にはいると、男はガラス戸だなの中の人形たちを見て、じぶんの持ってきたユリ子人形を長いすにかけさせ、おかあさんから代金をうけとると、いくどもおじぎをして帰っていきました。

サナエちゃんは、みんなが部屋を出ていつて、ユリ子人形とさしむかいになると、三十分ほど身動きもしないで、じつと人形を見つめていました。うれしさに、気がとおくなるほどでした。

やがてサナエちゃんは、ふと人形に呼びかけました。

「ユリ子ねえちやま！」

長いすにかけている人形の目がこちらを見たように思われました。きつと、聞こえたのにちがいません。

「あたし、ねえちやまが好きよ。好きで好きでたまらないわ。」
サナエちゃんは涙ぐんでいました。

涙でかすんだ目で、じつと見つめていますと、ユリ子人形がにこやかに笑って、「さあ、だっこしてあげますから、いらつしやい。」といっているように見えました。

「おねえちやま！」

サナエちゃんはそう叫んで、人形の胸にとびついていきました。

深夜の怪

進一君は、なんだか心配になってきました。人形を買ってから三日ほどたったのですが、サナエちゃんが、あんまり人形に夢中になって、ほんとうに気でもちがうのではないかと、気づかわれたからです。

進一君は、どうもあの人形はあやしいと思いました。だいいち、売りにきた男が気にいりません。あいつは、西洋の悪魔みたいな顔をしていました。ひよつとしたら、魔法つかいかもしれません。魔法つかいの持つてきた人形なら、魔法の人形です。サナエちゃ

んがあんなに夢中になるのも、その魔法にかかっているからでしょう。

その晩進一君は、恐ろしい夢を見て、真夜中に、ふと目をさましました。

なんだか、へんな感じがします。どこかで、とほうもないことが起こっているような気がして、しかたがないのです。ひよつとしたら、サナエちゃんがどうかしたのではないかと、心配になってきました。

進一君は、ベッドから出て、手早くまくらもとにあつた服をききました。そして廊下に出ると、足音を立てないようにして、隣の部屋の前にしのびより、そつとドアをあけてみました。

サナエちゃんは、ベッドの上で、すやすやと寝ています。心配したようなことは、なにも起こっていないかったです。

またそつとドアをしめて、廊下に出ました。そして、じぶんの寝室にもどろうとしていますと、どこからか、かすかに、こつこつという音が聞こえてきました。

たちどまつて、じつと耳をすましました。

廊下のまがり角のむこうから聞こえてくるようです。こつ、こつ、こつ、こつ。だれかが歩いているのでしょうか。しかしスリッパが、こつ、こつ、こつという音をたてるはずはありません。水道の水がしたたっている音かと思いましたが、それでもないのです。ネズミが、板をかじっているのでしょうか。それともちがいます。

進一君は、なんだか胸がどきどきしてきました。どうも、ただごとではありません。魔性ましようのものが近づいてくるような感じがす。

足音をしのばせて、廊下のまがり角までいってみました。たしかにその音は、まがり角のむこうから聞こえてくるようです。

進一君は、からだをかくして、かたつぼうの目だけで、そつとのぞいてみました。

うす暗い廊下のむこうから、パツと巨大な花がひらいたような美しいものが、こちらへ歩いてきます。

進一君は、ギョツとして、からだがかしびれたように動かなくなつてしまいました。顔をひっこめようとしても、ひっこめられな

いのです。

それは、ユリ子人形でした。ゆうぜんのふり袖に、きんらんの帯のあの美しい人形が、こつ、こつ、こつと歩いてくるのです。

「早く顔をひっこめなければ、あいてに気づかれる。」

と思つても、からだがいうことをききません。ひっこめることができないのです。

「あつ、気づいたな！」

そうです。たしかに気づいたのです。人形は立ちどまって、ジツとこちらを見つめています。 magari 角の壁から、はんぶん出ている進一君の顔を、穴のあくほど見つめています。

息のつまるような、にらみあいでした。おたがいの目から出る

光線が、空中でぶつかりあっているのです。それにしても、なんという恐ろしい目でしょう。あの美しい顔の目だけが、まるで、ヘビのようにぶきみです。たしかに生きた目です。人形の目ではなくて、人間の目です。

進一君は、この恐ろしいやつと、にらみあっているのが、たまらなくなってきました。いまにも気をうしないそうでした。

しかし、このにらみあいには、人形の負けでした。あいてには、生きていることを見つかったという弱みがあります。とうとう人形は、クルツとむこうをむきました。そしていきなり逃げだしたのです。

こちらが勝ったとわかると勇気がわいてきました。進一君は人

形の後を追っかけるのでした。

人形は、むこうの部屋のドアを開いて、その中へかくれました。サナエちゃんの部屋です。寝室ではなくて、昼間の部屋です。あのたくさんの人形がならべてある部屋です。

進一君は、その部屋のドアの前にかけてよりました。ドアはぴつたりしまっています。とつてをまわしてみました。かぎはかかっています。人形が、かぎを持っているはずもないのです。

思いきつて、ドアを開きました。そして、部屋の中へとびこんでいきました。

ユリ子人形は、長いすに腰をかけていました。進一君は、その顔をじつとみつめました。ふしぎ！ ふしぎ！ 人形は、もう生

きてはいませんでした。

ゆうぜんの着物の肩をおさえて、ゆすぶってみました。なんのてごたえもなく、ぐらぐらするばかりです。顔にさわってみました。こちこちした人形の顔です。手にさわってみました。やっぱりこちこちした人形の手です。ああ、いったい、これはどうしたことでしょう。

進一君は、命のなくなった人形の美しい顔を、じつと見つめて
いるうちに、心のそこから、ゾーツと恐ろしくなってきました。

ほのおの宝冠

そのあくる日、進一君は、おとうさんに夕べのことを話しましたが、おとうさんは、

「そんなばかなことがあるもんか。おまえはきつと、寝ぼけて、とんでもない思いちがいをしたのだろう。」
と、てんでとりあつてくださいません。

進一君が、それでも、「ぼく、たしかに見たんだ。」といいはりますと、「それじゃあ、人形部屋へいつてみよう。」と、ふたりでそこへはいつてユリ子人形をしらべましたが、いくらしらべても、ほんとうの人形で、これが動きだすなんて、まったく考えられないことでした。

おなかの中に機械じかけのある自動人形ではないかと、それも

よくしらべましたが、なんのしかけもないことが、はつきりわかったのです。

しかし進一君は、夕べ寝ぼけていたとは、どうしても思えないのでした。おとうさんの神山さんも、進一君が一生けんめいにいहारるものですから、すこし心配になってきました。

神山さんは、ひとりで奥の居間にはいると、そこへおかあさんをよびました。

その居間の床の間のよこに、大きな金庫がすえてあります。その金庫の中に、神山さんのだいな宝物がしまつてあるのです。

「そんなばかなことがあるはずはないが、もしあれがあやしい人形だとすると、この金庫の中の宝物をねらっているのかもしれない

い。」

ふとそんなことを考えると、宝物が金庫の中にあるかどうかを、たしかめてみなければ安心ができないような気持になってきたのです。

それでおかあさんをよんで、ふたりきりで、そつと金庫から宝物をとりだしてみました。

大きな四角い、皮の箱です。神山さんは、それをちやぶ台の上において、しずかにふたを開きました。

すると、皮箱の中のビロードの台座の上に、目もくらむような宝冠が、さんぜんとかがやいていました。

「ああ、やっぱりわしの思いすごしだった。人形がこれを盗みに

くるなんて、ばかなことがあるはずはないのだ。」

神山さんは、安心したようにつぶやきました。

「まあ、いつ見ても美しいこと！ でも、ぶじでようございましてわね。」

おかあさんも、うっとり宝物をながめながら、胸をなでおろすのでした。

それは神山さんが、ついこのごろ、ある外国の宝石商会から買いいれた、むかしヨーロッパのある国の女王さまの持ち物であった、黄金の冠かんむりでした。ダイヤモンドやルビーや、そのほかいろいろの宝石がちりばめてあつて、五色しきのほのおが燃えたっているように見えるので、だれいうとなく、「ほのおの宝冠」と名づけら

れていました。

神山さんは、こんなりっぱなものを店へおいてはあぶないと思つて、自分の家の金庫の中へ、たいせつにしまっているのです。「しかし、念のために、金庫のダイヤルの暗号をかえておこう。そうすれば、おまえとわしのほかには、だれもこの金庫を開くことができないのだからね。」

神山さんは、そういつて、しばらく考えていましたが、「そうだ、サナエという暗号にかえよう。これなら、むすめの名だから、わしもおまえも、わすれるはずがないからね。」
といつて、皮箱のふたをしめ、それを金庫の中にもどし、とびらを閉めると、ダイヤルをまわして暗号をかえるのでした。そのと

き、障子しょうじの外で、かすかなもの音がしましたが、神山さんたちは、すこしもそれに気づかなかったのです。

障子の外には、ユリ子人形が立ちぎきをしていました。

ああ、やっぱりユリ子人形は生きていたのです。あれほどらべても人形としか見えなかったのに、またしても人形部屋をぬけ出して、こんな遠い部屋まで立ちぎきにやってきたのです。

それはまだお昼まえでしたが、進一君とサナエちゃんは学校へいっていますし、女中さんたちは、台所やせんたく場において、広い家の中が、からっぽになっていたのです。

ユリ子人形は立ちぎきをしてしまうと、だれに気づかれる心配もなく、人形部屋へもどることができました。

それにしても、人形がどうして動きだすのでしょうか。これには、なにか秘密があるはずですよ。ひよつとしたら、ユリ子人形を売りにきた、あの西洋悪魔のようなやつが、遠くから魔法をつかっているのではないでしょうか。

少女探偵

進一少年は、中学校の帰りに電車にのって、千代田区のこうじま麴町ちのアパートへいきました。そここの明智探偵事務所をたずねて、少年探偵団長の小林君に相談をするためです。

進一君は、夕べのふしぎなできごとを、夢だったといいきるこ

とは、どうしてもできないので、団長の小林少年の知恵を、かりようとしたのです。

ところが、事務所へいってみると、明智探偵も小林少年も、どこかへ出かけていて、少女助手のマユミさんが、るすばんをしていました。

マユミさんは、一年ほどまえに明智探偵の助手になった十八歳のむすめさんで、少年探偵団員たちから、「探偵団のおねえさま」とあがめられ、したしまれていました。

マユミさんは、探偵助手になるとまもなく、「妖人ゴング」

(この全集三十七巻)のために恐ろしい目にあいましたが、その事件じけんもおわって、いまでは、勇敢な少女名探偵になっていました。

あの事件で、知恵もからだも、きたえられたので、もう、どんな男にも負けないほどの、すばしっこい、冒険ずきな女探偵になっていました。

進一君は、この「探偵団のおねえさま」と仲よしなので、すこしも気がねはありません。小林団長はどこへいったのかとたずねますと、明智先生といっしょに、ある事件のために名古屋方面へ出かけて、あさってでなければ帰らないということがわかりました。

それではというので、進一君は夕べのできごとを、すっかりマユミさんに話して、どうすればいいかと相談をしました。

「おかしいわね。あなた、ほんとうに夢を見たんじゃないの？」

「ぼくのおとうさんも、夢を見たんだろうというんだけれど、ぼくは、夢だとは思えないのです。たしかに、起きていたんです。」

「なにか秘密があるのね。その人形を売りにきた、西洋悪魔みたいな顔の人が、あやしいわ。きつと、なにかたくらんでいるんだわ。神山さん（進一君のこと）は、人形じいさんの事件、知ってるでしょう？ 甲野ルミちゃんという子がさらわれた事件よ。その西洋悪魔みたいな男は、あの人形じいさんと、なにか関係があるんじゃないかしら。あたしには、なんだかそんなふうに思われるわ。」

「そうでしょうか。そうすると、妹のサナエがさらわれるんじゃないでしょうか？」

進一君はひどく心配になってきました。

「そうともきめられないわね。もつとほかに目的があるかもしれないわ。あなたのうちに、なにか、どろぼうにねらわれるようなものが、あるんじゃないの？」

「ああ、そういえば、西洋の女王さまの宝冠があるんです。おとうさんは、お金にかえられないたいせつな宝物だといって、うちの金庫にしまっているのです。」

「じゃあ、それをねらっているのかもしれないわね。でも、そんなとりこしぐろうばかりしていてもしかたがないわ。だれか少年探偵団の人を電話でよんで、相談してみましよう。」

マユミさんは、そういつてしばらく考えていましたが、

「ああ、すっかりわすれていた。いまに、ふたりの団員が、ここへ遊びにくるのよ。井上いのうえいちろう一郎君と、ノロちゃんよ。ノロちゃんは、おくびようものでたよりにならないけれど、井上君は、知恵も力もあって、たのもしいわ。井上君のくるのを待つて、相談してみましようよ。」

「井上君ならいいですね。ぼく、あの人好きですよ。それに、ノロちゃんだつて、あいきようものだし……。」

進一君も、さんせいするのでした。

やがて、井上君とノロちゃんがやってきました。そこで、四人が探偵事務所の客間のテーブルをかこんで、相談をはじめました。「やっぱり、いつものやりかたが、いちばんいいよ。神山君の家

のまわりを、そつと見はつてゐるんだ。そして、あやしいやつが出てきたら、あとをつけるんだよ。」

井上少年が、すっかり話を聞いたあとで、意見をのべました。

「夜もかい？ 夜中もかい？」

ノロちゃん心配そうにたずねます。

「おそくなると、うちでしかられるというんだらう？ ぼくだつてそうだよ。だから、夜の九時ごろには、チンピラ隊とこうたいするのさ。チンピラ隊は、夜中だつてへいきだからね。」

チンピラ隊というのは、小林団長が上野公園などで集めた浮浪ふろう少年たちです。明智探偵はそれらの少年に、すりやかっぱらいをはたらかぬようによく教えて、「ありの町」という労働者の会の

会長をやっている友だちにたのんで、そこに住みこませ、くずひろいなどをやらせてあるのです。そして、なにか事件がおこると、「ありの町」の事務所へ電話をかけて、少年探偵団のてつだいをさせることになっていのです。

「じゃあ、それにきめましょう。むろん、あたしもいくのよ。小林さんがいないときには、あたしが少年探偵団の指揮官ですもの。あたし、男の服をきていくわ。そして、危険なことは、まっさきにあたしがやるのよ。みんな、とめるんじゃないのよ。あたし、冒険がしたくって、腕がむずむずしているんだから……。」

マユミさんは、青年のようなかつぱつな口調でいうのでした。すぐに「ありの町」へ電話をかけて、チンピラ隊のうち、手の

あいているこどもを、よびよせました。

そして、日のくれるのを待つて、マユミさんと井上君とノロちやんと、チンピラ隊三人と、あわせて六人が、それぞれ、きたない服をきて変装すると、自動車で神山進一君の家のそばまでいきました。

それから、ばらばらにわかれて、神山家のへいのまわりのものかげに身をかくし、なにかあやしいことが起こるのを、待ちかまえるのでした。

どろぼう人形

神山進一君は、みんなより一ひとあし足さきに家へ帰りました。進一君は家の中で、あのあやしい人形を見はっている役目です。

夜になって、なにかあやしいことが起こったら、二階の窓から、万年筆がたの懐中電灯を、パツ、パツ、パツ、と三度ずつ、ついたり消したりすることをつづけて、外の少年たちに、知らせる約束でした。この万年筆がたの懐中電灯は、「探偵七つ道具」の一つなのです。

夜になり、夕ごはんがすみ、勉強の時間がすみ、ベッドにはいるころになっても、べつになにごともおこりません。

進一君は、昼間の服をきたままベッドにはいりましたが、外で見はりをしている仲間のことを考えると、眠れるものではありません。

せん。

「もう九時すぎだから、井上君とノロちゃん、家へ帰ったかもしれぬ。だが、マユミさんとチンピラ隊は、まだ残っているだろう。まっ暗やみの中で、なにか起こるのを、じっと待っているだろう。」

そう思うと、なんだか、みんなにすまないような気がするのでした。

それから三十分もたったころです。進一君は、なぜか胸がどきどきしてきました。家じゅうの人がみんな寝てしまって、シーンとしずまりかえっています。そのしずかな中を、あの美しいユリ子人形が、こっそり歩いているのではないかと思うと、もうじつ

としていられなくなりました。

進一君はベッドを出て、そつとドアをあけ、廊下へ出ました。電灯が消してあるので、まっ暗です。足音をたてないように、壁をつたって、人形部屋のほうへ歩いていきました。

進一君はハツとして立ちどまりました。かすかに、ものの動くけはいが感じられたからです。

そこは、廊下がTの字になっていました。壁にからだをくつつけるようにして見ていますと、むこうの廊下が、ほのかに明るくなつたような気がします。

うす暗い中にもはつきり見える、ゆうぜんもようが、ひらひらとしました。ユリ子人形です。おばけ人形は、白い四角なふろし

きづつみのようなものを胸にだきしめて、むこうの廊下を、スーツととおりすぎていきました。

こんどこそ、夢ではありません。ユリ子人形は、やっぱり生きていたのです。しかし、あの白いふろしきづつみは、いったいなんでしょう？

「あつ、そうだ！ あの大きさ、あの四角い形、あれは、『ほのおの宝冠』の皮箱にちがいない。やっぱりそうだった。あいつは宝冠を盗むために、この家へはいりこんできたのだ！」

進一君は、とっさにそこへ気がつきました。そして、あいてにさとられぬように、あとをつけました。

ユリ子人形は、廊下のつきあたりまでいくと、そこの階段をの

ぼりました。階段の上は庭に面した廊下で、いくつもガラス窓が
ならんでいます。

おばけ人形は、そのまん中ほどまでいくと、そつとガラス窓を
開きました。

「あつ、窓から庭へとびおりるつもりかしら？ それなら、なに
も二階へあがらなくても、下の廊下の窓を開けばいいのに……。」
進一君は、ふしぎに思つて、ずつとこちらの窓のそばで、よう
すをうかがっていました。

すると、人形は、胸にだいていた白いふろしきづつみを、両手
で頭の上にさしあげました。

「おやつ、いったいなにをするんだろう？」

と思うまもなく、白いふろしきづつみは、まっ暗な庭へ、パツとほうりだされたではありませんか。

白いものが、スーツと曲線をえがいて、下の地面へ落ちていくのが見えました。

「あつ！ わかった。庭のやみの中に、だれかが待ちうけているのだ。そして、ふろしきづつみを受けとって、逃げだすつもりなんだ！」

進一君は、それと気づくと、その空部屋のドアを、そつと開いてすべりこみ、おもてがわに面した窓に近づいて、音のしないようにそれを開くと、万年筆がたの懐中電灯をとり出して、パツ、パツ、パツと三度ずつ、つけたり消したりすることを、なんども

つづけるのでした。

×

×

×

そのとき、へいの外のまつ暗な道に、ヘッドライトを消した一台の自動車がとまっていました。

まつ黒な服をきた男が、白いふろしきづつみをかかえて、へいをのりこえ、そこへ、走ってきたかと思うと、開いていたうしろのドアから、自動車の中にとびこみました。すると自動車は、音もなく動きだし、どことも知れず遠ざかっていくのでした。

そのとき、自動車のうしろで、みょうなことが起こっているのを、怪人物は、すこしも気づかなかったようです。

男がへいをのりこして走ってくるまでは、自動車のうしろの荷物を入れるトランクのふたが、三センチほど開いていました。

それが、男の足音をきくと、ちょうど敵におそわれた貝が、貝がらの口をとじるように、ピッタリしまったではありませんか。どうやら、トランクの中に人間がかくれているらしいのです。

それはチンピラ隊のひとりではないでしょうか。それとも、もしかしたら、男姿のマユミさんがトランクの中に身をひそめて、怪物のすみかをたしかめようとしているのではないのでしょうか。

ユリ子人形の秘密

進一君は、懐中電灯のあいずをしておいてから、すばやくかけ出しました。ユリ子人形がサナエちゃんの人形部屋へもどらないうちに、さきまわりをして、待ちかまえているつもりなのです。

進一君は、こんやは、はじめからその計画でした。いままで、ユリ子人形を追っかけたときは、人形よりもあとから、人形部屋へはいつたのです。すると、そこにいるのはいつも、たたけばこちこちと音のする、ほんとうの人形でした。

ですから進一君は、生きて動く人形が、こちこちの人形とかわるところを、見てやりたいと思いました。それには、人形よりさきまわりをして、人形部屋の中に、かくれていなければならぬのです。

進一君は、いまこそ、さきまわりをするときだと思いました。

ユリ子人形は、あの四角いふろしきづつみをなげてから、そのまま窓のところに立って、じつとまつ暗な庭を見おろしていました。下にいる男が、うまくつつみを受けとって逃げだすのを、たしかめようとしているのです。

そのとき進一君が、懐中電灯のあいずをした窓は、ユリ子人形のいる窓よりも、ずっと人形部屋に近かったので、だいじょうぶ、さきまわりができるのです。

進一君は、足音をたてないようにかけ出して、人形部屋へはいました。そして壁のスイッチをおすと、パツと電灯がつきましました。

その光で、ひと目、部屋の中を見たとき、進一君は、「あっ！」と声をたてて、立ちすくんでしまいました。

いつのまにかユリ子人形が、ちゃんと、部屋に帰っていたからです。

「そんなはずはない。廊下は一本なんだから、ぼくのほうがはやかかったにきまつている。ユリ子人形は、まだ廊下をはんぶんも歩かないころだ。」

進一君は、そう考えました。それにまちがいはないのです。

「はてな？」と、こくびをかしげていましたが、やがて、ハツとあることに気がつきました。

「あっ！ そうだ。ユリ子人形はふたりいるんだ。ひとつは、こ

ちこちの、ほんとうの人形、もうひとつは、そっくり同じ着物をきた、生きた人間！ そうだ！ そうにきまっている。いままで、どうして、そこへ気がつかなかったのだろう。

ぼくが追っかけてきたときには、人間のほうは、おしいれの中かなんかにかくれてしまつて、人形のほうだけが、いすにこしかけているもんだから、ごまかされたんだ。生きた人間がいつぺんに、ちこちの人形にかわつてしまつたように見えたんだ。

それじゃこんどは、こつちが、おしいれの中にかくれて、あいつの帰ってくるのを待ちぶせしてやろう。」

進一君は、とっさのあいだに、これだけのことを考えました。

そして、すばやくおしいれにはいつて、ふすまを細めに開き、じ

つと、ようすをうかがっていました。

すると、こつ、こつ、こつ、こつと、廊下に、人形の足音が、聞こえてきたではありませんか。あくまで人形が歩いていると思わせるために、足になにか、かたいものをはいているのでしょう。つまり、人形が生きて動くという、怪談をつくり出して、みんなをおどかさうとしているのです。

進一君は、息をころして、ふすまのすきまから目をみはっていました。心臓のどきどきする音が聞こえるほどです。

ドアがスーツと開きました。ああ、はいつてきたのです。ユリ子人形が、はいつてきたのです。

こちらにこしかけているユリ子人形、ドアのところに立っ

るユリ子人形、そっくりです。着物のもようも、帯も、そして、顔までも。

長いふり袖、はでなゆうぜんもよう、ピカピカ光るきんらんの帯、美しい人形がふたりならんでいるのです。

進一君は、息もできないほどでした。こんなふしぎなことが、あるものでしょうか、人形とそっくりの顔をした少女が、もうひとりいるなんて。

いや、そうではありません。少女が人形に似ているのではなくて、この少女をモデルにして、人形をつくったにちがいありません。それならばつに、ふしぎでもなんでもないので。

ユリ子人形とそっくりの少女は、ドアの前をはなれて、こちら

へ歩いてきます。やっぱり、このおしいれの中へかかれるつもりでしょう。

進一君は、グツと心をひきしめました。このぶきみな少女と、たたかわねばならないのです。

少女は、もう二メートルほどに近づきました。一メートルになりました。いまだです！

進一君は、パツとふすまを開いて、おしいれの中からとび出しました。

「あっ！」

少女が、おどろきの叫び声をたてました。そして、くるつとうしろをむくと、いきなり、ドアのほうへかけ出すのでした。

「まてっ！」

進一君も、すぐに、そのあとを追いました。ドアをとび出して、廊下を走りました。

少女は、走りながら、帯をといています。帯が、すっかりとけました。庭にめんした窓に走りより、そこに出ているくぎに、帯のはじをひっかけました。そして、あつと思うまに、少女は、窓の外へとび出したのです。

進一君も、その窓へかけつけました。少女はくぎにひっかけた帯をつたって、庭へおりていきます。そして、パツと地面へとびおりました。

「おうい、だれかきてくれえ。……ユリ子人形をつかまえてくれ

え……。」

進一君は、ありつたけの声を、ふりしぼって叫びました。そして、じぶんも、帯をつたって、庭へおりていくのです。

少女は庭におりると、へいのほうへ走りながら、ふり袖の着物をぬぎすててしまいました。その下に、黒のうすいワンピースを着ていたのです。

進一君も、庭へとびおりました。そして少女のあとを追いながら、

「おうい、はやくだれか、ユリ子人形をつかまえてくれえ……。」と叫びましたが、だれも家の中から出てくるようすがありません。少女はもう、へいによじのぼっていました。かるわざ師のよう

に、身の軽いやつです。進一君もへいの下にかけつけて、少女の足をひっぱろうとしましたが、もうまにあいません。へいの上に、すつくと立った少女のすがたは、パツと、外の道路へとびおりてしまいました。

それにしても、この少女は、このあいだから、いったいどこにかくれていたのでしょうか。ずっと、おしいれの中にいるわけにはいきません。ひよつとしたら、あの黒いワンピースを着て、ふり袖や帯をかかえて、毎晩、外からしのびこんでいたのかもしれない。

チンピラ隊の活躍

そのときへいの外には、三人のチンピラ隊が待ちかまえていました。チンピラたちは、進一君の叫び声をきいたのです。

「ユリ子人形を、つかまえてくれ。」

とは、いったい、どういういみなのかと、ふしんに思いましたが、しかしカンのいいチンピラたちには、すぐにさっしがつきました。ユリ子人形は、いまに、この道路へ逃げだしてくるだろうと、へいの外の地面に身をふせて、待ちかまえるのでした。

むこうのへいの上に、黒いかげが動きました。そして、またしても、進一君の叫び声でしたかと思うと、その黒いかげが、パツと地面にとびおりました。

ユリ子人形はふり袖を着ていると聞いていたのに、この少女は黒い洋服のようです。長いあいだまつ暗なところにいて、やみに目がなれているので、チンピラたちには、それがよくわかりました。

「へんだなあ。あれ、ユリ子人形だろうか？」

「だって、へいからとびおりたんだから、まちがいないよ。」

「じゃあ、あいつを、つかまえようか。」

「もちろんさ。」

チンピラたちは、そんなことをささやきあつたかと思うと、地面にふせていたのがパツと立ちあがり、恐ろしいいきおいで、少女のそばにかけよりました。

少女はへいからとびおりて、ちよつと、ころんだものですから、たちまち、チンピラたちにつかまってしまいました。

「あらつ、あんたたち、あたしをどうしようっていうの。まあ、きたないこじきの子どもじゃないの！」

少女は、らんぼうなことばで、チンピラたちをしかりつけました。そして、ふりはなして、逃げだそうとするのですが、どうして、はなすものではありません。

「なに、こじきだつてばかにするねえ。おいらは少年探偵団の別働隊で、チンピラ隊っていうんだ。明智先生の弟子だぞっ！」

三人のチンピラは、口ぐちに、そんなことをわめきながら、少女の上のしかかって、組みふせてしまいました。

そのときです。とつぜん、やみの中から太い声が聞こえてきました。

「こらっ、チンピラども、その子をいじめると、しようちしないぞっ！」

びっくりしてふりむくと、そこに、ボーツと、大きな男の姿が、立ちはだかっていました。黒いセーターをきた男です。

「あつ、てめえ、どこのやろうだっ！」

チンピラのひとりが、どなりかえしました。

「なまいきいうな。さあ、その子をはなせつ。」

男は、いきなりそばによると、チンピラの手をつかんだり、首をつかんだりして、ひとりずつ、地面になげつけました。

「ワーツ、いてえ！」

「てめえ、悪者のなかまだなっ！ 逃がすものかつ。」

なげられても、チンピラたちは起きあがって、男にむしやぶりについていくのでした。

しかし、男はひどく力が強くて、チンピラ三人ではとてもかかないません。みんなひどくなぐりつけられて、へたばってしまいました。

「ざまあみろ。もう動けないだろう。それじゃ、あばよ！」

男はにくまれ口をのこして、少女をひったてると、その手をとって、やみの中へ逃げさってしまいました。

そのときになって、やっと門のほうから、神山さんと進一君が

かけつけましたが、もうあとのまつりでした。ユリ子人形にばけていた少女を、ついにとり逃がしてしまったのです。

×

×

×

そのころ、宝冠のつつみを持った男の自動車は、世田谷区のはずれの、さびしい原っぱの中にある、古い西洋館の前にとまっていました。

男は、白い四角なふろしきづつみを、だいじそうにかかえて車をおりると、運転手になにかささやいてから、その西洋館の門の中へ、はいつていきました。

それは赤れんがの二階建ての西洋館で、よほどむかしに建てら

れたものとみえて、西洋のばけものやしきみたいな、ぶきみな、
ものです。

へいはこわれ、門の鉄のとびらはいびつにゆがみ、ツタにおお
われた西洋館は、やみの中に、やみより黒い巨大な怪物が、うず
くまっているような感じでした。

門のとびらがこわれているので、かぎがなくても、自由にはい
れるのです。男が門の中に消えると、自動車のうしろのトランク
が、しずかに開いて、中からひとりの若ものが、はい出してきま
した。男の子の服をきたマユミさんです。やっぱりマユミさんが、
トランクにかくれていたのです。マユミさんは、なにか四角な白
いつつみを、こわきにかかえています。おやつ？　これはどうし

たというのでしよう。さっきの男が持っていた白いつつみと、そ
つくりです。

マユミさんは、いつのまに、こんなつつみを手に入れたのでし
よう。あの男から、とりかえたのでしようか。いや、そうでは
ありません。さっきの男も、たしかに同じようなつつみをかかえ
ていました。

ごらんなさい。あの男は、赤れんがの西洋館の入口に立って、
かぎでドアを開いています。その石だんの上に、ちゃんと、白
いつつみがおいてあるではありませんか。

ポケット小僧

ところが、ふしぎなことに、マユミさんが、自動車のトランクから出てしまっても、まだトランクの中で、なにか、もごもご動いているものがあります。

マユミさんは、犬かネコでも、つれてきたのでしょうか？

いや、動物ではありません。人間の子どもです。トランクの中から、すばやくとびだしてきたのは、七つか八つぐらいに見える、ちっちゃな男の子でした。

顔はまっ黒によごれ、ぼろぼろの服をきています。チンピラ隊のひとり、名まえはポケット小僧という少年です。

ポケット小僧とは、へんな名ですが、ポケットにはいるほど、

小さいといういみなのです。十二にもなっていて、七つか八つぐらいに見えるほど小さいので、そんなあだなでよばれるようになりました。

しかし、からだは小さいけれども頭はいいし、ひどくすばしっこい少年で、これまでに、いろいろ手がらをたてたことがあります。チンピラ隊だいちの人気ものでした。

ポケット小僧は、マユミさんを、たいへん尊敬していますので、マユミさんが自動車のトランクにかくれて、怪人のすみかへいくのを、だまって見ていられなかつたのです。じぶんもいっしょについていって、マユミさんをまもりたいと思ったのです。

マユミさんが、トランクの中へしのびこんだとき、すぐあとか

ら、ポケット小僧が、もぐりこんできましたので、おろそうとしました。どうしてもおりません。すみっこのほうにくつついて、ここでも動かないのです。

トランクの中であらそって、運転手に気づかれたらたいへんですから、マユミさんも、つい、そのままにしておいたのです。いま、あやしい西洋館の前で、トランクからポケット小僧があらわれたのは、そういうわけだったのです。

ふたりは、ひじょうにすばやく、トランクからすべり出したので、運転手はすこしも気づかず、そのまま車を出発させ、むこうのほうへ、遠ざかっていきました。

マユミさんとポケット小僧は、やぶれた門をはいって、西洋館

の玄関のほうへいそぎました。ひごろ、音をたてないで走ることを練習しているので、ふたりとも、いくら走っても、すこしも足音がしないのです。

怪人は、西洋館の入口のドアの前にたつて、なにかコトコトやっています。かぎでドアを開こうとしているのでしよう。

あたりは、まっ暗です。西洋館の窓からは、すこしもあかりがさしていません。まるで空家のように、しずまりかえっているのです。

怪人は、宝冠のはいつた白いふろしきづつみを、石段の上において、しきりにドアを開こうとしています。かぎがよくあわないのか、ずいぶんてまどるようです。

すると、そのとき、石段のへんのやみの中に、もうろうと、ネズミ色の影が近づいてきました。暗くてよくわかりませんが、どうやら人間のようです。

その影は、石段に近よったかとおもうと、そのまま、また、スーッと遠ざかって、やみの中へとけこんでしまいました。

怪人は、すこしも、それに気がつきません。やつとドアが開いたので、石段においてあったふろしきづつみを持って、ドアの中にはいり、中から、カチンとかぎをかけてしまいました。

カーテンのすきま

マユミさんとポケット小僧は、一度門を出て、どこかへいきましたが、三十分もすると、また、西洋館の門の前にもどってききました。見ると、マユミさんは、あの白いふろしきづつみを持っていません。ポケット小僧もから手です。いったいあのふろしきづつみを、どうしてしまったのでしょうか？

「おねえさん、もう、よしたほうがいいよ。こんなばけものやしきの中へはいったら、どんな恐ろしいめにあわされるか、わかりやあしないよ。」

ポケット小僧が、マユミさんのうわぎをつかんで、ひそひそと、ささやきました。

「いいのよ。このまま、警察へ連絡してもいいんだけど、も

うちよつと、さぐっておきたいの。どろぼうのかしらだが、どんなやつだか、この家には、どんなしかけがあるか、それをしらべておかなけりやあ、名探偵の助手のはじだわ。あんた、帰りたければ、さきにお帰りなさいな。」

マユミさんは、じゃけんにいって、小僧をつきはなしました。

「いやだい。おれ、帰るもんか。どこまでも、おねえさんのあとから、ついていくよ。」

ポケット小僧は、おこつたようにいって、もうひとことも口をきかず、だまりこんで、マユミさんのあとからついていくのでした。

マユミさんは、門をはいって、西洋館のよこてへ回っていきま

した。どの窓にも、あかりは見えませんが、死にたえたように、シーンと、しずまっていますのです。

マユミさんは、どこかにしのびこむすきまはないかと、だんだん、奥のほうへ歩いていきました。

すると、ひとつの窓の中に、かすかなあかりが見えたではありませんか。おやつと思つてたちどまり、その窓のそばによつて、そつと、中をのぞいてみました。

ガラス窓の中に、あついカーテンがさがつていて、そのあわせめが、開いています。

マユミさんは、窓ガラスに顔をつけるようにして、のぞきました。

電灯ではなくて、テーブルの上のろうそくが、赤ちやけた光をなげています。そのにぶい光の中に、ふたりの男がテーブルをへだてて、むかいあつていました。せまいすきまなので、ふたりの顔が、はんぶんくらいずつしか見えません。

しかし、そのひとりには、宝冠のつつみを持って、自動車に乗ってきた男にちがいありません。

そのむこうがわにいるのは、ふしぎな人物です。頭を、まん中からきれいにわけてなでつけ、キュツとさかだつたまゆの下に、ほそい目がキラキラと光り、高いワシ鼻、ぴんとはねたまつ黒な口ひげ、三角がたのあごひげ。西洋悪魔の絵とそっくりの顔です。それが、黒いビロードのガウンをきて、ひじかけいすに、ゆつた

りとしかけているのです。

「先生がお帰りになるのを待っていました。先生、うまくいきましたよ。ユリ子人形が、金庫の暗号をたちぎきして、盗みだしてくれたのです。それをうけとって、ここへ持ってきました。先生の計略は、みごとにあたりましたね。」

自動車に乗ってきた男が、しゅびよく宝冠を盗みだしたことを、西洋悪魔のような男に報告しているのです。西洋悪魔を、先生、先生とよんでいます。

この西洋悪魔みたいなやつは、神山さんのうちへ、ユリ子人形を売りにきた男ですが、こいつの正体はいつたい、何者でしょう。むろん、人形じいさんと関係があるのにちがいありません。もし

かしたら、人形じいさんと同じ人かもしれません。魔法つかいのことですから、どんな顔にでもばけられるのでしよう。

「うん、あのユリ子は、なかなか知恵がはたらくからね。きつと、うまくやつてくれると思っていたよ。……では、その宝物を、見せてもらおうか。」

先生とよばれた西洋悪魔が、いかにもうれしそうな顔でいきました。

男はすぐに、テーブルの上においてあった、白いふろしきをほどこきます。中から四角い皮ばりの箱が出てきました。男は、その箱のふたに両手をかけて、うやうやしく持ちあげましたが、持ちあげたかとおもうと、「あっ！」という叫び声が聞こえてきまし

た。西洋悪魔と、部下の男とが、一度に叫んだのです。

箱の中は、からっぽだったのです。「ほのおの宝冠」は、かげもかたちもありません。そして、宝冠のかわりに、ビロードの台座の上に、一枚の紙がおいてありました。

西洋悪魔は、いそいで、その紙をとって読んでいます。読むにしがたがって、かれの顔が、まっかになつてきました。さかだつているまゆが、いつそうさかだち、ほそい目が、リンのようにかがやき、赤いくちびるをひきしめて、ぎりぎりと、歯がみをしているのです。

マユミさんは、その紙にかいてある文章を、ちゃんと知っていました。

それは、

きみは、ユリ子人形をつかって、うまくやったと思っ
ているだろうが、上には上があるのだ。宝冠は、たしかにかえしてもらったよ。どうして宝冠を、箱の中から、ぬき出したかわかるかね。ユリ子人形は、たしかに、宝冠のはいつた箱を盗みだした。それなのに、いつのまにか、宝冠が消えてしまったのだ。

お気のどくさま！

と、いうのです。なぜそれをしていたかといいますと、じつはこの文章は、マユミさんが、じぶんで書いたからです。

マユミさんは、宝冠が盗まれそうだとわかったとき、神山進一君から、箱の色や大きさをきいて、にたような箱を手にいれ、そ

の中へこの手紙をいれて、ちやんと用意しておいたのです。ほんものと同じように、白いふろしきでつつむことも、わすれませんでした。

その白いふろしきづつみを持って、自動車のトランクにかくれ、男が、ほんもののつつみを西洋館の入口の石段において、かぎを、ガチャガチャやっているすきに、そつと、ほんものとにせものを取りかえて、逃げだしたのです。そして、宝冠のつつみを、近くのお友だちの家にあずけておいて、また、西洋館へひきかえしたというわけでした。

マユミさんは、じぶんのトリックがうまくいったので、うれしくてたまりません。夢中になって窓の中をのぞいていました。そ

れが、ゆだんでした。すこしも気のつかないまに、マユミさんのまわりには、恐ろしい怪物がおしよせていたのです。

人造人間

窓をのぞいていたマユミさんは、ふと、じぶんのうしろに、なにかうごめくけはいを感じました。あれはてた庭の草むらが、さやさやと、かすかな音をたてているのです。

マユミさんは、ゾーツとしました。ふりむくのがこわいのです。ポケット小僧ではありません。あの子が、こんな音をたてるはずはないのです。なんだか、大きなヘビが、草むらをわけて、はい

よってくるような感じなのです。

しかし、いくら恐ろしくても、このままじつとしていたら、どんなひどいめにあうかもしれません。思いきつてうしろを見るほかはないのです。

マユミさんは、そう決心すると、パツと、うしろをむきました。まつ暗です。まつ暗な中に、なにやら大きなものが、もやもやと、うごめいています。

いままで、ろうそくの火を見ていたので、やみに目がなれていません。しかし、それがだんだんなれてきました。すると、そこうごめいているものが、ぼんやりと、見わけられるようになってのです。

マユミさんは、心臓がとまってしまふような気がしました。そこには、どんなおぼけや幽霊よりも、もつと恐ろしいやつが、ヌーツと、たちはだかつていたからです。

そいつは、ふつうの人間の倍もあるようなからだで、ごつごつした岩のような、かっこうをしていました。ぜんたいに、鉄のような黒い色で、頭が、おそろしくでつかくて、四角ばっているのです。

ふたつのまんまるい目が、まっかに光っていました。口は大きくて、のこぎりのような歯が見えています。四角ばった手足が、まるで鉄の板でできているようで、それが、ちようつがい動くみたいに、ぎくしやくと、歩いてくるのです。

マユミさんは、これは人造人間にちがいないと思いました。そいつが、やみの空をうしろにして、ヌーツと、つつたつているありさまは、なんともいえない気味のわるさでした。命のない作りものだと思うと、いつそう恐ろしいのです。

ポケット小僧はどうしたのかと、キョロキョロと、そのへんを見まわしましたが、どこにも姿が見えません。いったい、どこへいったのでしょうか。あんなチンピラでも、こういうときに、そばにいてくれれば、いくらか、こころづよいでしように！

やっぱり人形です。命がなくて動く人形です。人形じいさんも、こんどの西洋悪魔も、人形づくりの名人です。むすめ人形が動いたのは、トリックでした。しかし、ここには、機械じかけで動く

ロボットがいるのです。恐ろしい人造人間がいるのです。

しかも、それがひとつだけではありません。やみの中から黒い鉄の大入道が、つぎからつぎと、あらわれてくるではありませんか。同じかたちのロボットです。目には電灯がしかけてあるでしょう。みんな、まっかな目を光らせています。赤いネオンのような色です。それが、またたきでもするように、パツ、パツと、ついたり消えたりしているのです。

ロボットは、みんなで五つでした。でも、マユミさんには、それが二倍にも三倍にも感じとられたのです。

みなさん、想像してごらんなさい。まっ暗やみの庭に、人間の倍もあるような大きな鉄の機械人間が、五つもあらわれて、まっ

かな目をパチパチやりながら、ちようつがいの足で、のっし、のっし近づいてきたら、その恐ろしさはどんなでしょう。たいていの人なら、きつと気をうしなってしまうにちがいありません。

ロボットたちは、ギリ、ギリ、ギリという、歯車の音をたてて、もう目の前に近づいてきました。

マユミさんは、逃げようと思いました。ロボットとロボットのあいだをくぐって、逃げようと思いました。

しかし、どうしても逃げられないのです。ロボットは、まるで人間のように、マユミさんの逃げるほうへ、足をあげたり、手を出したりして、じやまをするのです。鉄の手はおそろしい力で、はねのけることなど思いもありません。

「助けてえ……。」

マユミさんは、とうとう、悲鳴をあげてしまいました。そして、西洋悪魔のいる窓のそばへ逃げもどりました。西洋悪魔でもなんでも、ロボットよりは、ましだと思っただけです。

その窓は、いつのまにか、まっ暗になっていました。ろうそくを消してしまったのでしよう。

がらがらつと、ガラス戸の開く音がしました。そして、まっ暗な部屋の中から、ニーツと、二本の手が出てきたかとおもうと、やにわに、マユミさんの両腕をつかんで、かるがるとつりあげ、あつというまに、部屋の中へ、ひきいれてしまいました。

西洋悪魔か、あの部下の男か、どちらかです。しかし、どちら

にしても、あいては人間です。マユミさんは、恐ろしい人造人間にとりかこまれているよりは、どんなにましだかしれないと、思いました。

「きさまは、何者だつ。」

やみの中から、ふとい声がきこえました。西洋悪魔の声です。

マユミさんは、部屋の床にころがされたまま、だまつていました。すると、こんどは部下の男の声で、

「先生、ひよつとしたら、こいつが、くせものかもしれませんよ。どうもおかしいことがあるんです。あつしはさつき、玄関のドアをあけるのに、ちよつとてまどつた。そのあいだ、ふろしきづつみを石段の上においといたのです。」

そのすきに、なかみをぬかれたか、それとも、べつの箱のつみと、すりかえられたかしたにちがいない。いま思いだしてみると、そのときから、ふろしきづつみが、いやに軽くなったのです。ああ、そうだ。そうにちがいない。

先生、こいつは、敵のまわしものですね。まさか、明智小五郎じゃあるまいが、明智の手下にちがいない。ぶちのめして、どろをはかせましょうか。」

男は、やつと、そこへ気がついたようです。

「いや、おれに、まかせておけ。おれは、ちよつと、こころあたりもある。もし、こいつが明智の手下だとすると、だいじな人じちだよ。ひとつ、明智先生へのおみやげに、こいつにおれの魔力

を見せてやろう。ウフフフフ……。」

西洋悪魔は、ぶきみな声で、さもおかしそうに笑うのでした。

地底のジヤングル

「おい、きみは何者だ。男の服をきているが、どうも女らしいね。ああ、わかったぞ。明智探偵の助手に、マユミという少女がいると聞いたが、きみはそのマユミだろう。宝冠のつつみをすりかえたのもきみにちがいない。え、そうだろう？ さあ、はくじようしたまえ。」

西洋悪魔が、恐ろしい顔になって、せめたてるのです。

マユミさんは、どう答えたらいいのかわからないので、だまつて、あいてをにらみつけていました。

「答えられないかね。それじゃ、おれのいったことが、あたつていたんだね。きみの顔に、そう書いてあるよ。ウフフフフ……まあいい。せつかくきてくれたんだから、おもしろいものを見せてあげよう。きみのびつくりするようなものだよ。そして、まあ、とうぶんここに、滞在するんだね。え、わかつたかね。きみはもう一生、明智探偵のところへは帰れないのだよ。」

ことばはおだやかですが、じつに恐ろしいいみがこもっています。西洋悪魔は、マユミさんを、いつまでも、この家にとりこにしておくつもりなのです。

「さあ、こつちへきたまえ。おもしろいものを見せてやる。おれは美術家だからね。人形も作るし、そのほか、いろいろなものを作る。そして、おれの作ったものには、みんな、たましいがはいって動きだすのだ。さっきのロボットも、やっぱり、おれが作ったものだよ。」

西洋悪魔は、そういつて、マユミさんの手首を、ギユツとにぎりました。まるで鉄でしめつけられるような恐ろしい力です。ふりほどくことなど思いもありません。

ぐんぐんひっぱられるままに、マユミさんは立ちあがって、そのあとからついていきました。

ドアの外の廊下に出て、むこうがわのドアから、べつの部屋に

はいりました。

「しばらく、ここに待っていたまえ。いまにきみを、いいところへ案内してやるからね。」

西洋悪魔はそういつて、ピシヤンと、ドアを閉めると外からかぎをかけて、どこかへいつてしまいました。

マユミさんは、ドアのそばに立つて、部屋の中を見まわしました。なんのかぎりもない、がらんとした部屋です。まん中に大きなテーブルが、ひとつおいてあるばかりです。そのテーブルのむこうに、ひとりの男がいすにかけていました。

みような男です。まっかな背広をきて、恐ろしくでっかい、みどり色のちようネクタイをしています。頭の毛は、西洋人のよう

に茶色で、ふさふさして、顔は、あぶらでもぬったように、てらと光っています。そして、茶色のモジャモジャしたまゆげの下に、まんまるな目が、じつと、こちらを見ているのです。

気味のわるいことに、その目が、こちらを見たまま、すこしも動きません。まばたきもしないのです。いや、目ばかりではなく、からだぜんたいが、まるでミイラのように、ちつとも動かないのです。

マユミさんは、なんだかゾーツとして、逃げだしたくなりしました。しかし、逃げるところがありません。たった一つのドアに、さつき、西洋悪魔が、かぎをかけていってしまったからです。

「きみ、こちらへきたまえ。」

子どものような、かんだかい声が聞こえました。テーブルの男がいったのでしよう。しかし、口はすこしも動きません。目も動きません。

まるで腹話術でもやっているような感じでした。

マユミさんが、へんじもしないでつつたつていきますと、その男は、また、同じことをくりかえしました。

「きみ、こちらへきたまえ。」

それを聞くと、マユミさんは、なんだか、大きなじしやくに引きよせられるような気がしました。歩きたくないと思っても、しぜんに、足が前に出るのです。

そして、テーブルのほうへ、三足^{みあし}ほど進みますと、

「えへへへへ……。」と、なんともいえない、へんてこな笑い声が聞こえました。テーブルの男が、目も口も動かさないうちで笑ったのです。その笑い声がまだおわらないうちに、恐ろしいことがおこりました。

マユミさんの立っている足の下床が、なくなってしまったのです。

マユミさんは、一瞬、からだは宙に浮いたかとおもうと、スーッと、深い深い谷そこへ落ちこんでいくような気がしました。そして、どしんと、しりもちをつきました。

マユミさんの歩いていた床板が、落とし穴になっていて、そのふたが、開いたのです。それで、からだは、宙に浮くような気が

したのです。その下に、すべり台のようなものがついていて、マユミさんはその上をすべって、地下室に落ちたのでした。

上の部屋のテーブルのむこうにいた気味のわるい男は、西洋悪魔が作った人形で、あの声は、テープレコーダーの声だったかもしれません。人形は、「こちらへきたまえ。」といって、マユミさんを、落とし穴の上まで、歩かせるだけの役目だったのでしよう。

地下室は、ひどくうす暗くて、目がなれるまでは、なにがなんだかよくわかりませんでした。やがて、ぼんやりと、あたりが見わけられるようになりました。

そこは、森のようなところでした。家の中に森があるなんてへ

んですが、大きな木が立ちならんでいるのですから、森にちがいありません。写真で見た南洋のジャングルのような、ものすごい森です。

マユミさんは、夢を見ているのではないかと思いました。地下室に森があるなんて、ふつうには考えられないことです。

おばけの木

ジャングルには、見たこともないような、みような木がしげつています。枝ではなくて、ふといつるがむやみにのびて、おたがいに巻きつきあっているのです。木の葉は、みんな恐ろしく大き

く、まつさおな巨人のうちわのような形や、ふつうのシダを千倍にしたような形のものなどが、ウジャウジャと、かさなりあつて
いるのです。

そんな、おぼけのような木の葉のしげったむこうに、チラツと、
まっかなものが見えました。その色が、あんまりあざやかなので、
火が燃えているのではないかと思つたほどです。

マユミさんは、あつけにとられてしまいました。そして、とり
こになつたこともわすれて、そのジャングルの中を、見てまわり
たいような気持になりました。

そこで、しりもちをついたおしりをさすりながら、おずおずと、
ジャングルの中へはいつていきました。

へビのようにもつれている、つるのような木の枝や、巨大な木の葉のあいだを、くぐって歩いていきますと、さつきの、まつかなもののそばにきました。

それは、びっくりするほど巨大な赤い花でした。ユリの花を千倍にしたような形です。それを見ると、マユミさんは、じぶんが十センチぐらいのこびとになったような気がしました。その巨大な花を、ふつうのユリの花とすれば、マユミさんは、チョウくらいのおおきな花です。

ふと気がつくと、背中の方で、ごそごそ動いているものがありました。なんだか人間の手のようです。ギョツとしてふりむくと、ふとさ五センチもあるような長いつるが、へビのように、マ

ユミさんに巻きつこうとしているのです。

びっくりして逃げようとしたが、そのつるは、まるで生きもののように、とつさにパツとのびて、あつというまに、マユミさんのおなかを、ひと巻きしてしまいました。

恐ろしい力です。一度巻きつけば、もうはなすものではありません。つるは、ぜんまいのように、くるくると、木のみきのほうへちぢんでいって、あつというまに、マユミさんを、空中につりあげてしまいました。

マユミさんは、手足をばたばたやって、のがれようと思いました。が、ぐんぐん、上につりあげられるばかりです。

マユミさんは、いつか本で読んだことがあります。南洋のジャ

ングルの中には、恐ろしい木があつて、つるで人間を巻きこんで、たべてしまうというのです。人をくう木です。

これはきつと、その、人をくう木にちがいないと思いました。
「助けてえ……。」

マユミさんは、空中でもがきながら、悲鳴をあげました。すると、

「えへへへへ……。」

と、ジャングルにひびきわたる、恐ろしい笑い声がおこりました。おぼけの木が笑つたのでしょうか。その木は、ふたかかえもあるふといみきで、その上のほうに、なんだか、人間の顔みたいなのがありました。木のみきのしわが、目や、鼻や、口に見えるの

です。

あの口が、ガツとひらいて、いまにも、くわれてしまうのではないかと、生きたここちありません。

「えへへへ……。まあ、ゆるしてやるよ。この森には、まだ、いろいろとおもしろいものがあるから、ゆつくり、見物するがいい。」

そんな声が出したかと思うと、木のつるがずつと下にさがって、マユミさんを地面におろし、巻きつけていたのが、くるくると、はなれてしまいました。

ジャングルの王さま

マユミさんは、しばらくのあいだ、そこにたおれたまま、ぐつたりとしていました。ふと気がつくとき、むこうのしげみのあいだで、なにか、ちろちろと動いているものが見えました。

なんだか、青黒い、ぬめぬめしたやつです。そいつが、大きなシダのような葉をかきわけて、ヌーツと、こちらへ出てきました。マユミさんは、大きなにしきへびではないかと、ギョツとしましたが、へびではありません。足があるからです。

ああ、ワニです。へびよりも恐ろしい、人くいワニです。

でも、青黒いからだのワニなんて、あるでしょうか。

そいつが、はんぶんばかり姿をあらわしました。形は、ワニと

そっくりです。とび出した二つの大きな目、とんがった口を、ぱくぱくと開くたびに、赤黒い長いしたが、ちろちろと、ほのおのようにとび出します。

ああ、わかった。トカゲです。ふつうのトカゲの、何千倍もあるような、おぼけトカゲです。からだか、ぬめぬめと光っていて、チヨロツ、チヨロツと歩くところが、トカゲそっくりなのです。

へびほどこわくはないけれど、こんな大きなトカゲなら、人間をくつてしまうかもしれません。

マユミさんは、逃げたいのをがまんして、じつとしていました。身動きしたら、パツと、とびかかってくるだろうと思ったからです。

大トカゲは、チヨロチヨロとはい出してきました。そして、マユミさんのそばまでくると、首をもたげて、じろりと、こちらの顔を見ました。そして大きな口を、ガツと開き、あの赤黒いほのおのようなしたを、ペロペロと出して、いまにもマユミさんの顔をなめそうにするのです。

マユミさんは、からだがしびれたようになって、動くことも、どうすることもできません。声さえ出ないのです。

大トカゲは、マユミさんのまわりを、ぐるぐるまわりはじめました。えものを見つけたうれしさに、おどりまわっているようなかっこうです。

しかし、ほんとうは、そうでないことがわかりました。大トカ

ゲも、なにかを恐れて逃げてきたのです。

「ねえさん、用心するがいいよ。いまにジャングルの王さまがやってくるからね。おれは、あいつがこわいのだよ。まつぶたつにひきさかれてしまうからね。ねえさん、おれのみかたになって、助けておくれよ。」

大トカゲは、マユミさんのまわりをぐるぐるまわりながら、子どものようなきいきい声で、そんなことをいいました。

このジャングルでは、木がものをいったり、トカゲがものをいったりするのです。西洋悪魔が魔法の力でこしらえたジャングルですから、なにからなにまで、ふしぎなことばかりです。

マユミさんは、大トカゲが、あんがい弱虫なので、すこし安心

しましたが、ジャングルの王さまとは、いったい何者でしょう。どんな恐ろしいやつがあらわれてくるのかと、こんどはそれが心配になってきました。

「そらっ、きたきた。ジャングルの王さまがやってきた。ねえさん、用心するがいいぜ。」

大トカゲが、また、きいきい声でいきました。

すると、むこうの木のしげみが、がさがさと動いて、そこから人間の倍もある大きな手が、ヌーツとあらわれました。茶色の毛におおわれていて、てのひらは、まっ黒です。

やがて、もう一本の手があらわれ、両手で木の葉をかきわけながら、恐ろしい顔を、のぞかせました。

顔も茶色の毛でおおわれ、その中に、ギロリとした目が光っています。ひらべったい鼻、黄色い歯をむきだした、耳までさけた口。ああ、ゴリラです。このジャングルには、ゴリラがすんでいたのです。

巨大なゴリラは、もう全身をあらわし、ふといみじかい足で、よたよたと、こちらへ近づいてきます。

そのものすごいかつこうを見ると、マユミさんは、もうがまんができません。

「キヤーツ！」

と、悲鳴をあげて、逃げだそうとしました。

そのとき、ゴリラの口から、「グルルルル……。 」というよう

な恐ろしい声がひびき、パツと、こちらへとびかかってきたではありませんか。

マユミさんは、いまにもつかみ殺されるのかと、おもわず、地面に身をふせましたが、ゴリラがとびかかったのは、マユミさんではなくて、大トカゲでした。

「キューン！ 助けてくれえ……。」

大トカゲのいきいきい声が、ひびきわたりました。

ゴリラは、大トカゲにとびつくと、いきなり、毛むくじやらの両手を、上あごと下あごにかけ、「グルルル……。」とうなつて、大トカゲの首を持ちあげました。

つぎの瞬間には、じつに恐ろしいことがおこったのです。ゴリ

ラは大トカゲの口を、両手で、グーツと開いたかとおもうと、そのままめりめりと、しつぽのほうまで、まつぶたつにひきさいてしまったのです。

ところが、ふしぎなことに、大トカゲは、ひきさかれても、血が出ないのです。そして腹の中には、はらわたでなくて、大きいのもや、小さいのもや、たくさん歯車が、ウジャウジャとはいつていました。

まつぶたつにひきさかれると、その歯車が、ジャラジャラと音をたてて、地面にこぼれ落ちたではありませんか。

この大トカゲも、生きているのではなくて、歯車のしかけで動く作りものでした。西洋悪魔は、人形だけでなく、動物までこし

らえる、ふしぎなうでを持っていたのです。大トカゲが、きいきい声でしゃべったのも、きつと、テープレコーダーのしかけでしょう。

ゴリラは、大トカゲの腹の中から、歯車がこぼれ落ちたのを見ると、いきなり両手で、それをかきまわしました。すると、歯車のあいだから、レコードのテープらしいものが、クシヤクシヤにもつれて、あらわれたのです。

ゴリラは、大トカゲのしがいを、めちやめちやにふみつぶしてしまうと、こんどは、そこに、ぼんやりとつつ立っていたマユミさんのほうに、恐ろしい顔をむけました。

ゴリラと大ワシ

マユミさんは、もう生きたここちもありません。いまにとびかかってきて、さっきの大トカゲのように、まっふたつにひきさかれるのかと思うと、いまにも気がとおくなりそうでした。

ゴリラは、黄色い歯をむきだして、にやにやと笑いました。いや、笑ったのではないのでしょうか、そんなふうに見えたのです。そして、毛むくじやらの両手を、ニューツとのばして、マユミさんをつかまえようとしてました。

そのときです。ピューツと、むこうのまつ黒な空から、恐ろしい風がふいてきました。立ちならぶ大きな木の枝やつるが、魔女

の髪の毛のように、いっぽうへなびきました。

サーツという音が聞こえました。なにか恐ろしく大きなものが、空からふってきたのです。

あんまり大きいので、はじめはなんだかわかりませんでした。それは、一羽の巨大なワシでした。かたほうが二メートルもあるような、大きな羽をひろげて、風をきって、舞いおりてきたのです。ゴリラは、マユミさんから目をはなして、ギョツとしたように、空を見あげました。大ワシのほうでも、人間のマユミさんなんかには目もくれません。まっしぐらにゴリラをめがけて、つつかかってきたのです。

そこで、ジャングルの王さまと、空の王さまとの、ものすごい

たたかいははじまりました。

大ワシは、その大きなするどいくちばしで、ゴリラののどをめぐらして、とびかかってきます。ゴリラは「ウォーツ。」とうなつて、両手で、大ワシの首をつかもうとします。しかし、大ワシにも、二本のたくましい足があります。その指のするどい爪つめが、ゴリラの肩や胸にくいいるのです。

ワシが、大きな羽をばたばたとやると、飛行機のプロペラのような風がおこり、マユミさんは吹きとばされそうになりました。あたりを木の枝も、ざわざわとゆれ、小さい草などは根もとからおれて、ほこりのようにとびちるのです。

あつ！ ゴリラがたおれました。大ワシは巨大な羽でゴリラを

つつむようにして、くちばしで、あいてののどをせめています。

ゴリラはやられてしまったのででしょうか。どうしてどうして、ジャングルの王さまは、そんな弱虫ではありません。

「ガアアツ、ウオオツ……!!」

という、恐ろしいうなり声がひびきわたりました。そして、ふとい毛むくじやらの二本のうでで、大ワシの首を、ぐいぐいと、じぶんの胸にしめつけています。そのたびに、大ワシのくちばしが、じぶんののどにくいいるのですが、そんなことには、びくともしません。ゴリラの首は、あつい毛皮に松ヤニをぬり、そこへ砂をぬって、鉄のようにかたくなっています。さすがの大ワシも、このかたいのどを、くいやぶることができません。

「グルルルン、ゲゲゲゲゲ……。」

みような音がひびきました。大ワシが首をしめられて、悲鳴をあげたのです。

大ワシは、もうあいてをせめる力もなく、苦しまぎれに大きな羽を、ばたばたとはばたくばかりです。そのはばたきも、だんだん、おとろえていきました。

くるつと、ゴリラが上になりました。そして、その巨大な重いからだで大ワシを下じきにして、おしつぶそうとしています。両手は、あいてののどをしめつけたまま、すこしもゆるめません。

とうとう、大ワシは動かなくなってしまうました。ゴリラは、首をしめていた手をはなして、こんどは大ワシの羽をねじちぎり、

腹をひきさきました。

すると、ああ、これはどうしたことでしょう。大ワシのはらの中からは、またしても、かぞえきれないほどの大小の歯車が、ジヤラジャラとこぼれ出したではありませんか。

この大ワシも、西洋悪魔がこしらえた作りものだったのです。

マユミさんは、それを見て、ホツと安心しました。大トカゲも、大ワシも、作りものだったとすると、ヒヨツとしたら、ゴリラも、歯車で動く作りものかもしれないと思ったからです。

でも、あの恐ろしい目でにらまれ、黄色い歯をむき出されると、やっぱり気がとおくなるほどこわいのです。

マユミさんは、逃げだしたいと思いました。いまなら逃げられ

ると思いましたが。しかし、逃げようとしても、足がたちません。からだじゅうがしびれたようになって、そこにうずくまったまま、どうすることもできないのでした。

ゴリラのけらいたち

ゴリラは、勝ちほこったように立ちあがって、「ウオーツ、ウオーツ。」と、うなり声をたて、両手でじぶんの腹を、ボーン、ボーンとたたくのでした。かちどきをあげているのです。

すると、それがあいずだったのか、ジャングルの奥のほうから、「きい、きい。」と叫び声をたてながら、たくさんのサルが出て

きました。

一ぴき、二ひき、三ひき……、八ひき。みんなで八ひきです。顔とおしりのまっかな、ふつうのサルどもです。ゴリラは人間のおとなよりも、ずっと大きいのですが、いま出てきたサルどもは、人間のこどもくらいの中からです。みんなジャングルの王さまのけらいなのでしょう。ゴリラのまわりをとりかこんで、うやうやしく王さまを見あげながら、一ぴきずつ、そこへうずくまるのでした。

ゴリラは、それに答えるように、もう一度、「ウォーツ。」とうなつてから、マユミさんのほうをふりむきました。そして、こんどはおまえの番だぞ、といわぬばかりに、のっし、のっしと、

こちらへやってくるではありませんか。

「キヤーツ！ たすけてえっ……。」

マユミさんは、からだがしびれているので、逃げることはできませんから、ありったけの声をふりしぼって、叫ぶばかりです。

ゴリラの巨大な毛むくじやらのからだだが、一メートルまで近づきました。

もうだめです。いまに、首をしめられるか、両足を持って、まっつぱたつにひきさかれるかと思うと、マユミさんは、頭から、スーツと血がひいたようになって、なにも見えなくなってしまうました。気をうしなつたのです。

ところが、そのとき、なんともわけがわからないことが起こり

ました。

「ウオーツ！」

ゴリラが、おこったようになり声をたてました。けらいのサルたちが、ゴリラの足にからみついてきたからです。一本の足に、三びきずつのサルがかさなりあつて、とりついているのです。

ゴリラは、足でけちらそうとしましたが、小さいサルでも、六びきの力にはかえません。あつというまに、ゴリラはそこへころがってしまいました。

「きい、きい、きい、きい……。」

サルどもは、よろこびの叫び声をたてて、ゴリラのからだの上へ、かさなりあつていきました。ゴリラは、四本の手足をめつた

むしように動かして、はらいのけようとしませんが、逃げてはあつまり、逃げてはあつまり、しゅうねん執念ぶかくせめてくるので、どうすることもできません。

「ガアアツ、ウォーツ……。」と、恐ろしい声で、ほえるばかりです。

マユミさんは、ふと気がつくくと、一ぴきのサルに、だき起こされていました。その毛むくじやらのからだにさわったので、ギョツとして悲鳴をあげようとしたが、そのとき、人間のことがばが耳のそばで聞こえました。

「だいじょうぶですよ。ぼく小林です。いまに、あいつの秘密をあばいてやるから、見ていらっしやい。」

マユミさんは、夢ではないかと思いました。じぶんを助け起こしてくれたサルが、人間のことばをしゃべっているからです。

「わかりますか。ぼく小林ですよ。」

そんなこといわれたって、わかるはずがありません。あいてはサルです。サルが小林だなんて、さっぱりわけがわかりません。しかしその声には、聞きおぼえがありました。明智探偵の助手としては、マユミさんよりせんぱいの、小林少年の声です。

「あなた小林芳雄さんなの。」

マユミさんは、かすかな声でたずねました。

「そうですよ。マユミさんを助けにきたのです。いまに、明智先生や中村警部もここへやってきますよ。」

「それじゃあ、あの西洋悪魔は。」

「あれをごらんさない。ほら、あすこにいますよ。」

マユミさんは、キヨロキヨロとあたりを見まわしました。

あの恐ろしいゴリラは、おおぜいのサルに、ひどいめにあっています。サルどもは、よってたかつて、ゴリラの頭を、スポットとぬきとってしまいました。ぬきとったといっても、首ではありません。ゴリラの仮面をぬがせたのです。あのゴリラの中には、人間がはいつていたのです。ゴリラの頭の部分をぬきとってしまうと、その下から人間の顔があらわれました。

あつ、西洋悪魔です。黒い髪の毛をまん中からわけて、ぴんとはねた口ひげと、あごひげをはやした、あの西洋悪魔が、ゴリラ

の毛皮をかぶってばけていたのです。

ばけのかわをはがされたので、もうしかたがないと思ったのか、西洋悪魔は、着ていたゴリラの毛皮もぬぎすててしまい、ぴったりに身についた黒いシャツとズボンの姿になって、すつくとそこに立ちあがりました。

「やいつ、きさまたち、気でもちがつたのかつ。手下のくせにおれを、こんなめにあわせるとは、なにごとだつ。」

恐ろしい声で、どなりつけるのです。すると、一ぴきのサルが、人間のこどもの声で答えました。

「おれたち、おまえの手下じゃないよ。おまえの手下は、むこうの部屋に、みんなしぼりあげてあるのさ。」

「えっ、なんだって？ それじゃあ、きさまたちはいったい何者だ。」

「少年探偵団と、チンピラ別働隊だよ。おらあ別働隊のほうさ。だが、団長もいるよ。ほらマユミさんのそばにいる、あの大きいサルが小林団長だよ。」

ああ、これはどうしたことでしょう。小林団長のひきいる少年探偵団とチンピラ隊とが、いつのまにか地底のジャングルへしのびこんでいたのです。

あとになってわかったのですが、このてがらをたてたのは、マユミさんが、ロボットにせめられているとき、どこかへいなくなってしまうたポケット小僧でした。ポケット小僧は、やはりチン

ピラ別働隊のひとりで、ポケットへはいるほど、からだが小さいというので、そんなあだなをつけられていたのです。

からだは小さいけれども、たいへんすばしっこい子どもで、マユミさんがあぶないと見ると、すぐに町へとび出して行って、小林団長に電話をかけて、西洋悪魔のすみかをしらせ、それから、じぶんはこの家にとってかえして窓からのびこみ、からだの小さいのをさいわいに、だれにも知られないように、家じゆうを歩きまわって、地底のジャングルの秘密もしらべてしまったのです。

地底のジャングルは、むろん、西洋悪魔がつくったこしらえもので、その奥がくやに楽屋がくやのような部屋があり、そこに八人の少年がサルの毛皮をきて、ゴリラ大王のけらいになって、ジャングルへ出

ていくということも、すっかりわかってしまったのです。

電話を聞いた小林団長は、すぐにそのことを明智探偵に知らせ、じぶんは、近くの少年探偵団員五人と、チンピラ隊五人を呼びあつめ、自動車でこの家へかけつけました。そして、ポケット小僧とうちあわせたうえ、楽屋へとびこんでいって、八人の少年をしばりあげ、声を出さないようにさるぐつわまではめたのです。それから、団員とチンピラ隊から八人の少年をえらんで、サルの毛皮を着せ、ゴリラのけらいになりすまして、ジャングルの中へあらわれたというわけでした。ゴリラが、ふいをうたれておどろいたのも、むりはありません。

ジャングルのとりもの

八ぴきのサルは、つぎつぎと毛皮をぬいで、正体をあらわしました。白シャツに下着だけの少年たちや、ボロボロのセーターをきたチンピラどもです。奥のほうから、サルにならなかつた、ふたりの学生服の少年も出てきました。

小林少年も毛皮をぬいで、シャツ一まいの姿をあらわしました。そして、マユミさんの手をとって、にこにこしながら、西洋悪魔の顔をながめるのでした。

西洋悪魔は、にくにくしげに少年たちの顔を見まわしていましたが、とつぜん、おかしくてたまらないというように笑いだしま

した。

「ワハハハハハ……。小林君、なかなかあじなことをやるね。ワハハハハ……。だが、おれが、きみたちみたいなのにも負けると思っっているのかね。おれは、魔法つかいだぜ。このうちには、きみたちの思いもつかない恐ろしいしかけがある。いまに、泣きべそをかかないように、用心するがいいぜ。ワハハハハハ……。」

西洋悪魔は、笑いながら、五―六歩右へよつたかとおもうと、地面のある場所を、足でグツとふみつけました。すると、みんなの目の前が、パツとまっかになつて、バン、バン、バン、バンと、恐ろしい音がとどろきました。

赤い火の棒が、てんじょうに吹きあがつて、それが、美しい金

色の粉になって、地面に落ちてくるのです。

花火です。どこかのボタンを足でふむと、花火があがるようなしかけがしてあったのです。

みんなが、金色の花火に見とれていますと、その花火の音があ
いずだったのでしょう。ジャングルの木のみきのむこうから、ひ
とり、ふたり、三人、四人、五人、まっ黒なシャツとズボンの、
西洋悪魔と同じような姿の男が、魔物のようにあらわれてきまし
た。

「ワハハハハ……。おれのほんとうのけらいがやってきたぞ。さ
あおまえたち、このチンピラどもをかたっぱしからひつくくつて
しまえ。あのむすめも、逃がすんじゃないぞ。」

西洋悪魔が、勝ちほこったようにどなりました。

こちらはこどもが十人、あいては西洋悪魔をいれて六人です。とてもかありません。逃げようにも、黒シャツの男たちは四方からあらわれたので、逃げるにすぎがありません。

男たちは、にやにや笑いながら、両手をひろげて近づいてきます。ひとりの少年が、たちまちつかまつて、「ワーツ。」と、悲鳴をあげました。

そのとき、へんなことが起こりました。ジャングルの木のみきのうしろから、またしても黒いかげが、ブーツとあらわれてきたのです。

おやつ！　こんどは、ぼうしをかぶって、制服をきています。

おまわりさんの制服です。ひとり、ふたり、三人……七人です。それが、つぎつぎとあらわれて、黒シャツの男たちのうしろへ近づいてくるではありませんか。

「あつ！ 中村さん。」

小林少年が思わず叫びました。それは警視庁の中村警部だったのです。ほかの六人は、その部下の警官たちです。

「おお、小林君、この子どもの案内でやってきたよ。」

中村警部はそういつて、うしろにいた小さい少年を、前におし出しました。

「あつ、ポケット小僧！」

「小林さん、よかったねえ、もうだいじょうぶだよ。明智先生も、

いまにここへくるよ。」

ポケット小僧が、おどるようなかつこうをして叫ぶのでした。警官たちは、いきなり黒シャツの男たちにとびかかっていき、あちこちで、恐ろしいとつ組みあいが始まりました。

西洋悪魔は、身をかわしながら逃げまわっていました。が、またしても、大声で笑いだしたではありませんか。

「ワハハハハハ……。なに、明智がきたって？ そいつはゆかいだ。この家に、どんなしかけがあるかも知らないで……。」

ひとりの警官が、西洋悪魔にとびついていきました。

「おつとどっこい、きさまたちの手にあうおれじゃない。いまに、ほえづらかくなよ。」

パツととびのいて、木のかげに走りこんだかと思うと、カチツと音がして、とつぜん、ジャングルの中がまっ暗になってしまいました。電灯のスイッチをきったのです。

しかし警官たちは、こういうときの用意に、みんな懐中電灯を持っていました。あちらでもこちらでも、パツ、パツと懐中電灯が光り、その光線が空間をとびまわるのでした。

黄金のトラ

「ワハハハハ……。ここまでおいて、ほら、ここだよ。ワハハハハ……。だが、用心するがいいぜ。この家には、いろんなしか

けがあるんだからね。恐ろしい番人がかつてあるんだからね。ワハハハ……。ほら、ここだよ、ここだよ。」

西洋悪魔は、じぶんのいるところをおしえるように、パンパンと、手をたたきました。そして、その音が、だんだんむこうのほうへ遠ざかっていくのです。

あいつはいま、「番人がかつてある。」といいました。「かつてある。」というからには、それは人間でなく、なにか恐ろしい動物なのかもしれません。この地底の暗やみには、ゴリラや大トカゲや大ワシのほかにも、まだ動物がかくれているのでしょうか。

警官たちは、てんでに、懐中電灯を照らしながら、手の音のするほうへと、つきすすんでいきました。

ジャングルの大きな木のみきのあいだをとおりすぎると、むこうに、まっ黒なほら穴の入口があります。そこへ西洋悪魔がかけこんでいくのが、懐中電灯の光で、チラツと見えました。

「あつ、あすこにほら穴がある。いま、あいつが逃げこんだぞ。みんなあの穴へとびこむんだ！」

中村警部が、大きな声で命令しました。ふたりの勇敢な警官が、その穴へかけこんでいきます。

ふたつ角をまがると、懐中電灯の光のなかに、西洋悪魔がこちらをむいて、たちはだかっているのが見えました。そして、にやにや笑いながら、手まねきをしているではありませんか。

西洋悪魔の部下たちは、まだジャングルの中で、あとにのこつ

た四人の警官や少年探偵団員たちと、とっ組みあいをしていました。もう、手錠をはめられてしまったかもしれません。

ですから、ほら穴の中の西洋悪魔は、ひとりぼっちです。それなのに、どうしてあんなにおちつきはらっているのでしょうか。こちらはふたりの警官と、中村警部と、あとからかけこんできた小林少年とポケット小僧の五人です。いくらなんでも、ひとりぼっちの西洋悪魔が、かなうはずはありません。

あんまりあいてがおちついてるので、うすきみわるくなくなってきました。警官たちも、そこに立ちどまったまま進もうとしないのです。

そのときです。どこからか、「ウォーツ……。」という恐ろし

いうなり声が、ひびいてきました。人間ではありません。動物の声です。猛もうじゆう獣じゆうのうなり声です。

みんなはギョツとして、声のするほうを見ました。懐中電灯を、そのほうにむけました。

右手にべつのほら穴の口がひらいています。そこが枝道になっていたのです。あのうなり声は、どうやら、その枝道の奥からひびいてきたようです。

「あっ！」

まつさきに立っていた警官が、思わず声をたてました。なにを見たのでしょうか？ その枝道の穴の中に、なにかいるのでしょうか。

ピカツと光りました。金色のものです。そして、それが、だんだん大きくなってきました。なにものかが、穴の中から、こちらへ出てくるのです。

「ワハハハハ……。おい、用心しろ。番人が出てきたぞつ。いまに、きさまたち、くわれてしまうぞ。」

西洋悪魔は、そんなおどかしをいって、おもしろそうに笑っています。

「あつ、トラだつ！」

小林君が、それに気づいて叫びました。みんなは、たじたじとあとじさりをしました。

穴の中から、ヌーツとあらわれたのは、一ぴきの大きなトラで

した。しかも、そいつは金色に光っているのです。黄金のトラです。

「ガア……ウオーツ……。」

黄金の巨大なトラは、穴の外へ全身をあらわして、まっかな口をガツと開くと、また一声うなりました。

「ほら、あのおまわりさんをやつつけろ。あっちがわにいるのは、みんな、おれの敵だ。わかったか。」

西洋悪魔は、大声でトラをけしかけました。トラはそれにしがって、ヌーツとこちらをむきました。二つの目が、らんらんとかがやいています。

「ウオーツ……。」

するどい牙をむきだして、もう一度うなりました。そして、のそり、のそりと、こちらへ近づいてきます。

警官たちも、小林君も、逃げごしになっていました。ところが、ポケット小僧だけは、へいきです。にやにや笑いながら、もとの場所につつ立っているではありませんか。

「おい、ポケット小僧、あぶないよ。はやく逃げろ！」

小林君が、心配して声をかけますと、小僧は、こちらをふりむいて、いみあげに、また、にやりと笑いました。いったい、これはどうしたわけでしょう？

ところが、そのとき、みょうなことが起こりました。

こちらに近づいていたトラが、ふっと立ちどまったのです。そ

して、ゆっくりと、まわれ右をしました。西洋悪魔のほうに、むきなおったのです。

「おい、なにをしている。こつちじゃない。そこのおまわりを、やつつけるんだ。」

西洋悪魔はびっくりして、トラをどなりつけました。

しかしトラは、ゆうゆうと西洋悪魔のほうへ近づいていきます。そして、一メートルほどに近よったかと思うと、「ウォーツ……。」とひと声、パツとおどりあがって、いきなり、西洋悪魔にとびかかったではありませんか。

「ギャーツ……。」

西洋悪魔が、恐ろしい叫び声をたてたおれました。

トラは、その上にのしかかって、いまにも、相手ののどへくいつきそうにしています。

「ワハハハハ……。」

どこからか、西洋悪魔のとはちがった、ほがらかな笑い声がひびいてきました。

みんながびつくりして、そのほうをながめます。

トラの出てきたあのほら穴から、だれかの姿があらわれました。

「あつ、明智先生っ！」

小林君が、うれしいおどろきの叫び声をたてました。

それは名探偵明智小五郎でした。いつのまに、こんなところへきていたのでしょうか。いつもの黒い背広をきた、すらっとした姿

が、そこに立ちはだかっていました。

「ワハハハハ……、赤堀^{あかほり}さん、もういいから、皮をぬぎたまえ

」。

明智探偵が、わけのわからないことをいいました。赤堀さんとは、いつたいだれでしょう。どこにいますのでしよう。

すると、へんなことが起こりました。西洋悪魔の上にのしかかっていたトラが、あと足で立ちあがって、なにかもがやっていたかと思うと、おなかが、たてにスーツとさけて、中から、人間のしらが頭が、ニュツと出てきたではありませんか。

ああ、これはいつたい、どうしたというのでしょうか。

さいごの切り札

黄金のトラは、ほんとうのトラではなかったのです。トラの毛皮の中に、人間がはいっていたのです。あのうなり声は、毛皮の中に、なにかそんな音を出す笛が、しかけてあったのでしよう。口がひらくのも、ちようつがいになっていて、中の人間が、口でそれを動かしていたのにちがいありません。

すっかり毛皮をぬいってしまったのは、しらがの老人でした。どこかに、見おぼえがあります。ああ、そうだつ！ 赤堀鉄州老人です。小林君が少女にばけて、おぼけやしきにのりこみ、よろいびつにかくれていると、外から釘をうちつけてしまった、あのよ

っばらいじいさんです。じいさんは、明智探偵の弟子になりたいといっていました。いつのまにか、こつそり弟子入りをして、明智探偵の手だすけをするようになっていたのでしよう。

赤堀じいさんは、たおれている西洋悪魔をにらみつけて、どなりはじめました。

「こら、きさま、よもや、おれの顔を、わすれやしまい。きさまは、この赤堀鉄州の名まえをかたつて、木の宮運送店にルミちゃん人形を、甲野さんのところへとどけさせただろう。西洋悪魔に姿をかえているが、きさまは、あの人形じいさんにきまつている。わしを焼き殺そうとした、あの人形悪魔だつ。」

わしは、そのうらみをはらそうと思つて、明智先生に弟子入り

した。そして、ここにいるポケット小僧の手びきで、明智先生といっしょに、ここへしのびこんできた。

きさまの計略は、ポケット小僧が、みんなさぐり出していたんだ。だから、きさまの手下がこのトラの毛皮をきて、ここへあらわれるということもちゃんとわかっていた。

そこで、明智先生が先手をうって、この毛皮の中にはいついたきさまの手下をひつとらえ、しばらくあげて穴の奥にころがし、かわりに、わしが毛皮にはいつて、ここへあらわれたのだ。

ワハハハハ……、ざまを見ろ。わしは、とうとううらみをはらしたぞ。ああ、わしはせいせいした。こんな気持のいいことはない。ワハハハハ……、やい人形悪魔め、おもいしかったかっ。」

赤堀老人はそういつて、たおれている西洋悪魔を、思いきり、けりとばすのでした。

これで、ポケット小僧が、へいきな顔をしていたわけがわかりました。明智探偵や赤堀老人を、ここへ案内したのは、ポケット小僧だったのです。

「ちくしょうめ！」

西洋悪魔は、むくむくと起きあがり、恐ろしい顔で、ポケット小僧につかみかかろうとしました。

それを見ると、明智探偵がつかつかと前に出て、西洋悪魔をつきとばしました。

「おい、じたばたしないで、もう、かんねんするがいい。きみの

秘密は、なにもかも、みんなわかってしまったのだ。」

西洋悪魔は、ほら穴の壁に背中をくつつけて、明智をにらみかえしながら、

「なに、おれの秘密だと。ワハハハハ……、きさまに、それがみんなわかってたまるものか。おれのほうには、奥の手があるんだぞつ。」

「その奥の手も、わかっている。もう運のつきだと思いがいい。」
明智はしずかに、いつてきかせるのでした。

「地の底に、これだけのしかけをつくったのは、さすがに人形悪魔だ。しかし、種をわってみれば、みんな子どもだましにすぎない。あのジャングルは、ひじょうに広いように見えるが、あれは

パノラマ館のしかけで、ほんとうの木は、わずかしかないのだ。あとはみんな、壁にあぶら絵がかいてあるのだ。光線のぐあいでも、その絵とほんものとのさかいめが、わからないようにしてあるのだ、あんなに広く感じられるのだ。きみのとくいの奇術にすぎない。

大ワシや大トカゲも、てんじょうから、目に見えないような細かいじょうぶなひもで、つつてあつたのだ。それを、あやつり人形のように動かして、さも、生きているように見せかけたのだ。木のみきが怪物の顔に見えたのも、木そのものが、はりこの作りものだから、わけのないことだ。声は、みんなテープレコーダーだよ。ハハハハ……、種をあかせば、子どもだましじゃないか。

きみが人形じいさんになって、いろいろな人形や動物をつくり、世間をおどろかそうとしたのは、なんのためだ。それは、金や宝石をぬすむためにもつかわれたが、もつとほかに、目的がある。」

「フフン、それをきさまが、知っているのか。」

西洋悪魔は、にくにくしくいいはなちました。

「きみの目的は、世間をあつといわせたかったのだ。世間の中でも、このぼくを、あつといわせたかったのだ。なぜかというときみはぼくに、たびたび、ひどいめにあっている。そのうらみが、はらしたかったのさ。それほどぼくをうらんでいる男、また、世間をあつといわせてよろこぶ男は、ほかにはない。え、きみ、きみのほんとうの名をいってやろうか。」

明智は、そこでことばをきつて、にこにこと笑いました。すると、西洋悪魔は、まるで神さまの前に出たほんとうの悪魔のように、両手で顔をかくして、逃げだそうとしました。

「待てつ、きみのほんとうの名は、怪人二十面相だつ！」

ピシツと、むちでうつような名探偵の声でした。西洋悪魔は、顔をおさえたまま、ギョツとしたようにたちすくみました。しかし、すぐに気をとりなおして、顔から手をはなすと、血ばしった目をカツとひらいて、明智探偵をにらみつけるのでした。

「きさま、またしてもおれを、ひどいめにあわせやがったなつ。

よし、もうこうなれば、さいごの切り札だつ。いまに見ろつ。」
と叫ぶやいなや、パツと走りだしました。ほら穴の奥にむかって、

矢のようかけ出したのです。

「それっ」というので、明智探偵も、中村警部も、ふたりの警官も、小林少年も、そのあとを追いました。ところが、ポケット小僧だけは、みんなとはんたいの方角に走りだしたではありませんか。ポケット小僧は、いつでも、いがいなことばかりやる少年です。はんたいの方角というのは、つまり、ほら穴の入口のほうへもどっていくわけです。いったい、なにをしにいくのでしょうか。こちらでは、明智探偵たち五人が一生けんめいに追っかけましたが、西洋悪魔の二十面相は、もう死にもものぐるいですから、その早いこと。なかなか追っつけるものではありません。

二十面相は、ほら穴の奥の部屋のようなところへ、逃げこみま

した。逃げこんだかと思うと、そこが、パツと明るくなりました。二十面相は、燃えるたいまつをふりかざしているのです。そこにたいまつが用意してあつて、いつのまにか、ライターで、それに火をつけたのです。

「ワハハハハ……、さあ、おれのさいごを見てくれ。そのかわり、きさまたちも、みんな死んでしまうのだ。この地下道も、ジャングルも、その上にたっている西洋館も、みんな、吹っとんでしまうのだ。」

二十面相は、気がいのようにわめきました。たいまつの子火に照らされて、西洋悪魔の顔が、赤おにのように恐ろしく見えます。

たいまつを、ぐるぐるふりまわしているその下に、一つの大きなドラムカンが置いてあります。

あつ、たいへんです。きつと、あのドラムカンは、火薬がいつぱいつまっているのでしょうか。二十面相は、その中へたいまつを投げこむつもりです。そうすると、火薬が爆発して、なにもかも、こつぱみじんになってしまおうでしょう。

「さあ、かくごしろ。みんないっしょに死ぬんだぞつ。」

それを聞くと中村警部も警官たちも、まっさおになってしまいました。とびかかって、たいまつをもぎとろうにも、そのひまはありません。一歩ふみ出せばあいつはきつと、たいまつを投げこむでしょう。それを思うと身うごきもできません。

「ワハハハハ……。」

なにがおかしいのか、明智探偵がいきなり笑いだしました。中村警部たちは、びっくりしてその顔を見つめます。明智は気でもちがったのではないかと、うたがったのです。

「ワハハハハ……、投げこんでみたまえ。シュツと音がして、火が消えてしまうよ。おい、二十面相、ぼくは、きみの秘密はすっかり知っているといったじゃないか。むろん、その火薬の秘密も知っていたのだ。だから、火薬に水を、たっぷりかけておいた。見ろ！ そのドラムカンの中は水びたしだ。きみのさいごの切り札は、すっかりだめになってしまったのだ。」

それを聞くと、二十面相はギョツとしたように、たいまつ火

で、ドラムカンの中をのぞきました。明智のいったとおり、その中は水びたしです。

二十面相は、もう、ものをいう力もなく、へなへなど地面にうずくまってしまいました。

「それっ。」というと、ふたりの警官が、とびついていきました。たちまち手錠がはめられ、そのうえ用意の縄で、ぐるぐる巻きにしばられてしまいました。

そこへ、ポケット小僧をさきにたてて、おおぜいの少年がかけつけてきました。その中にマユミさんもまじっています。

「あれが二十面相だよ。明智先生は、とうとう、二十面相をつかまえてしまったんだよ。」

「ワーツ、すてき。明智先生ばんざーい！」

いちばんおくびょうもののノロちゃんが、まつさきに叫び、みんなも、それにあわせて、高らかに、明智先生と少年探偵団のばんざいを、となえるのでした。

青空文庫情報

底本：「魔法人形／サーカスの怪人」江戸川乱歩推理文庫、講談社

1988（昭和63）年5月6日第1刷発行

初出：「少女クラブ」講談社

1957（昭和32）年1月号～12月号

入力：sogo

校正：大久保ゆう

2018年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

魔法人形

江戸川乱歩

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>